主幹・麻生路郎

川柳雜誌

第七卷 第十一號

拾一月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和九年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

川柳雜誌社發行

清酒

句の秋・酒の秋

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘 嘉納合名會社釀

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髄脳

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

―文　苑―

柳壇の人々(四)……麻生路郎…(一八)
柳雨翁の柳多留講義初篇……蛭子省二…(二三)
二つのごろぼう……川村花菱…(二七)
縣人の句評……安川久流美…(三五)
竹馬居雜筆を讀みて……安西杏三…(三六)
ごて燒の味……辰己籬楓遺稿…(三七)
机上庭園雜草……綿谷摩耶火…(四四)
月評　卓を圍んで……路郎・紋太(ひろし)・山雨樓・町二…(一四)
續川柳家戸籍調……福田山雨樓…(三八)
不朽洞より……路郎生…(六〇)
杭全町メモ……綠雨生…(四一)
川柳書架……(四三)
各地柳壇……(四一)
柳翁忌……山雨樓記…(四六)
本社十月例會……公二記…(四八)

―創　作―

近作……麻生路郎…(四)
川柳塔……(一〇)

安井ひろし　松盛琴人　太田朝陽　松丘町二

出口雨町　住田亂耽　中島鐵洲　伊藤綠之助
水谷鮎美　朝田新水　酒井駒人　關本雅幽
高橋かほる　伊藤愚阡　橋本綠雨

○

楊井二南　安西杏三　中澤濁水　阿部閑生
川村觀月　中見光路　丸山公二　熊本黃峨
西村明珠　越中今雨　平井蒼太　藤岡櫻果
日野華水　河野双車　須崎豆秋　上野錦水
櫻井圓角　木村晃卓　生田翠夢　喜多春秋
池田雪峰　三好計加　植田湖舟　西田艸樂
山本凡々子

粒々集……長崎柳秀（一六）
光耀抄……（二四）
房子　誼子　縫子　吟女　壽枝女
近作柳樽……路郎選……（五）
同……ひろし選……（三〇）

——一路集（募集句）——

柿……松丘町二選……（三八）
秋……松盛琴人選……（三九）
橋……朝田新水・木村晃卓共選……（四〇）

近作

麻生路郎

酒がいつしか水になつてゐ

能力が米一キロになりにけり

家來とは違うぞ爭議委員だよ

同志の顔へ月がよろめく

家賃を呉れぬ　話聞き飽く

近作柳樽

路郎選

瞬きの瞳を盗む蓮の音	兵庫	篤男
遺言であつたと思ふ事に觸れ	同	同
手ぶらで行けば子が泣いてをり	同	同
おじぎする心に際があるものか	同	同
孤兒院のあつさり去んで哀れなり	同	同
資本家にほごよきものよ女事務	蛍ヶ池	愚龍
八萬圓食ふための詐欺にあらざりき	同	同
暴力はゆるされてゐず死ぬもよき	同	同
失業の身に赤々と夕陽てる	同	同
ほつといてくれとは妻も短氣者	龍田	翠峯
愛の巣はぶどう畑の中に見え	同	同
逃がすまいと金の力を借りて來る	同	同
道聞けばいちゞく匿す田舍の子	同	同
反對に息子はきりよう好みなり	大阪	沒食子

さり乍ら親のすゝめる嫁をこり　同
二階貸しますお隣りも失業者　同
スマートな二人夫婦こ見えぬなり　同
出戻つて近所の子等の髪を結ひ　神戸　卯生
炎天へ刄向ふつもり水車廻ひ　同
手をさすれぐも金にはならず　同
求職にあぐみ風呂を焚くなり　同
默々こして忠魂碑値ぶみされ　鳥取　湖山
妻のこゝ空想だつた十八九　同
淺はかな妻こ思へご子が二人　同
みまもれる闇に神火の盡きんこす　大阪　曉風
木琴に今日の心の音を見つけ　同
資本主義女給揃ひの服で居る　同
夕陽ながめて肺をやんでる　廣島　露斗
孝行な子に夕刊の賣り切れず　同
さかさまの富士をながめる旅の宿　同
人頼みばかりしてゐる失業者　大阪　靈電
失業の忌々しさを砂にねる　同
令夫人たまに冗談おつしやいな　同
青空へごちらも戀を忘れかけ　神戸　九葉
不平ある窓から見える高架線　同
早引へしたしみのある坂の土　同

俄か雨雞も一緒に走り込み　大阪　主税
連れ娘の目にも母の派出なる　同　同
笑ふのへ聾もついて笑ふなゝ　同　同
鬼灯がごうでも欲しい女の子　宮津　トシヲ
打水へ牛ゆる〳〵と通るなり　同　同
白百合へ疲れたこゝろ消えて行く　同　同
墓場まで愚痴をしよつてく女なり　大和　勝二
マネキンのいつまで處女で立てるのか　同　同
面白い顔に生れた父なし子　同　同
都會から暮しにすぎた貰ひ物　鳥取　清水
刈入れが濟めばごうにかなる氣で居　同　同
浮草のこゝに生きんと根をおろし　同　同
出し澁ぶる男死ぬなぞ思て居ず　朝鮮　如空
因業に見にくき戀のしてみたく　同　同
存在の價値を問はれて子が欲しく　同　同
佳き人に涙の多きこゝも秋　神戸　浪人街
夢多くして心配も多し母　同　同
未亡人といふ淋しさが何處にある　同　同
しゆんはづれの内紫を買ひ歩き　大阪　夕鐘
桃割の根締がゆるむ程ほたえ　同　同
可愛ゆうてならぬ母たり父たりき　神戸　嶺月
硯箱女世帶の硯箱　同　同

淋しさに大阪の夢なごを見ん　愛媛　英賀夫

名月は水の都も照るならん　同　さだを

隱しだてするだけ妻のいじらしく　大阪　同

ハンマーを握る腕に抱き上げて　同　不然

外交十訓こ事務所の壹を一人居る　神戸　同

病のよるこさはるこ待の話　同　憲坊

避暑の旅歸れば金魚死んで居り　大阪　同

朝顏を見るだけに起き又眠り　同　柳

なんぼでも降れこ非番の朝を起き　函館　青

買ふこ見てからの植木屋口をきゝ　同　同

女房に負ける事あり十二貫　大阪　豆佛

五割引さても女の怖ろしや　同　同

夕餉だけ一緒にこいふ共稼ぎ　松山　玄々子

拘引れてく姿あんまり美くしい　同　同

練瓦塀傘の雫を振りかける　奉天　登美坊

物質に不自由のないつらさこて　同　同

藥代よりはこ笑ふ米が要り　大阪　桂枝

同情はするが談判せぬこ云ふ　同　同

鳥居から新妻こいふ格になり　鳥取　暢山

水車小屋今朝もこうから音がする　同　同

顏伏せて戀してゐるこ思はせん　金澤　旭虹

清水あふれて鳥のゐぬ山　同　同

姿見の前で大きな嘘をつき　大阪　裸人
神經衰弱敷布のシミがこわくなり　同　同
貰ひ風呂歸りはつきり秋を知り　兵庫　美也光
二人して稼いたやつを借りに來る　同　安房　摩耶火
妻の起きた後の枕を抱いてみた　同　同
晝寢の鼻に夕刊が來る　同　同
理屈家も羽振がきかず失業し　堺　籬下
惱ましの女なければなご思ふ　同　同
うちの子の眞似ばかりする隣の子　大阪　菊路
夕刊を賣らすに惜しい女の子　同　同
リーダーの捕縛女工よ何處へ行く　島根　專路
プルの壁白く光つて冷た過ぎ　同　同

明石行（二句）

朝霧の中の白帆は夢でなし　神戸　三霞
野井戸汲む手許嬉しや旅心地　同　同
雨トボ〳〵七面鳥のみすぼらし　大阪　喜由
忠告を聞く代償に五圓借り　同　同
女の子だ南京玉を買ふてやろ　明石　了念
子の爲の浮世ゝ女あきらめて　同　同
朝の陽へ元の夫婦ゝなりにけり　堺　英三
やつぱりあやまらう妻も子もあり　同　同
迷惑をはつきり見せた娘なり　神戸　桃水

結局は親が負けてる　水枕　同

戀もせず一萬圓にして死ぬ氣　名古屋　草石

失業と見えぬ二階の涼しくて　同　同

春に子を入れて田家の秋になり　金澤　木偶人

砂の塔を子に築かせてゐる渚　同　同

煽風機いやにテーブを振り廻し　神戸　可村

思ひ出のこの文殼を火に借しみ　同　同

郊外の博士の家までのびた道　石川　柳月坊

落ち柿の音にも念佛申す歳　同　同

兩方から恨らまれないが母であり　大阪　二竹

バナヽ賣叩いて足らずむいてみせ　同　同

言ひたしてゐるのが少し氣に入らず　鳥取　源太夫

お遊びにいらつしやいだけの口上手　同　同

初めから失業ですと笑はせる　島根　濱郎

おべつかへ苦い皮肉が出そうだよ　同　同

散策にまで青春のこぼるゝよ　鳥取　耕民

貰ひ物社交の廣さ見せてゐる　同　同

我黨の政策不況を續けさせ　長野　柳兒

合理化の聲の前から職がなし　同　同

罵るは解雇せられてゐるのなり　大阪　日城

看病に疲れてお叩頭するばかり　同　同

四ツ角を淋しく廻る納豆賣　兵庫　普天

歸りには我子を乘せる空車　同
虫の良い同志互に損があり　京都　一の駒改め　一蘆

文學に志して

廿歳過ぎ萬年床に馴れてゐる　同　同
スピードの世間を他所に渡船　大阪　樹光
ラグトーゲンを半分殘して死んぢまひ　同　同
醉はぬ時いやに我身の弱く見へ　松山　紫石
汁粉屋の金は女房から拂ひ　同　同
肩書をかざしてこの娘嫁くのなり　金澤　白雨
十八で後妻なぞとはあんまりな　同　同
一風呂を浴びて將棋の負けつゞけ　松山　秋無草
カーテンを上げるゝ富士の迫つてゐる　同　同
外交員だけで儲けたやうに言ひ　大阪　吐句坊
ストライキ國の兄から金がくる　同　同
たまさかの紙幣だなめて數へよう　長野　らつぱ
親の恩金の恩にも泣かされる　同　同
意地にでもアンパイヤーはアウトにし　大阪　碧水
戀中にさせたは趣味の話から　同　同
本名の郵便藝者そつゝ受け　尼崎　虚白
卒業の遊ぶ袴を絽でつくり　同　同
色つぽい灯に輕蔑のさんざめき　大阪　秀昧
絽をきせた浮氣の虫は戎橋　同　同

スタートの火蓋へ風が吹いてゐる　東京　佐保蘭

一人つ子滿足をして打壞し　同　同

蜩にカタコト妻の夕仕度　大阪　素萠

密月は嬉しいけれど汽車に飽き　島根　麗亜

ごうして暮らそ虫よ鳴け〳〵　大阪　海洋人

京ごすと云ふその仲居美しく　同　あきら

榮葉服よごれただけの幸福さ　愛知　花蝶

他工場のスパイと思ふ眼で見られ　大阪　卯三

石鎚登山

お鎖の下で草鞋をはきかへる　愛媛　草蛇

若い氣で白粉も濃く塗つてみる　大阪　志洋

臺所に俺をもてなす音がする　石川　吉祥

其の戀をほんのそこらで見失ひ　大阪　ト居

サラリーで野菜を作る腕もあり　奈良　青柿

鐘つけばこゝろ慰さむまたつかむ　大阪　大夢子

運轉手絹の靴下に眩惑するな　金澤　旭花

金持のごこやら暗い顔でゐる　大阪　塊人

悲しみを親につけない女の子　石川　溪鶯

人間の慾と慾との血が流れ　大阪　丸葉

車夫だまり時の敗者の群となり　平塚　城月

笑ふまい笑ふまいとて横を向き　大阪　村樂

行水の側を通れば てらされる　兵庫　白水生

助たい氷がしみる夏の夜　大阪　四五磨

去んだ後座敷の塵に柄もしれ　鳥取　樂之雨

低聲になつて眞面目を取り戻す　大阪　八歩

叱つた子出れば後からそつこつけ　明石　靜波

葡萄畑都會の人の足こ知る　大阪　千春

友情はよしこ一言出して呉れ　京都　丁字

審査會親の自慢がつれて行き　大阪　明果

笠から笠へ續く山の家　奈良　白帝子

涙金だけで失業煙をあげ　大阪　山月

間違つた字を間違つた字で直し　浦江　繁坊

現在の世相を他所に琴の音　長野　可醉

集金に歸りを待たれ困るなり　大阪　北人

煩悶を苛だたすべき蚤こなり　泉南　鯉友

一言へ二言足すも女なり　大阪　黒天子

ヘッドライトの光に暫く背を向けて　島根　紫光

久濶をのべる内儀の痩せてゐて　大阪　燦郎

艶歌師が一人になれば淋しそう　同　みはる

あれもこれもこおばちやんの荷拵え　京都　道夫

雨宿りのここは忘れた百貨店　大阪　桃太郎

丁寧な挨拶子供おかしがり　同　凉哉

月評 卓を圍んで（前號）

路郎　紋太　町二
山雨樓　ひろし

町二――成程着想は陳腐だ。併し此句の救はれて居るのは普通なら山雨樓氏の云はれた様に作句する處を新傾向の俳句の手法をとつてこうした表現にしたため句品に於て優れたものになつたことである。

紋太――原句と訂正句と比較して其間に作句境地の相異と云ふ様なものを思はせられる。此句は別にユーモアを示そうとして居ない。唯閑寂な境地に立つて居る作者を思はせられる。俳句の手法に近い感じを持つて居るので、どちらかと云へば僕には靜か過ぎて物足りない程である。同じ詩材でも作者の立場から表現に斯うした相違があるのは當然だと思ふ。

路郎――僕は訂正句と原句とが同じであると云ふ説には服し難い。成程原句の方は調子が訂正句よりも悪いと云ひ得るが調子の悪い原句が、調子のいゝ訂正句よりも内容に於て少しく異つたものを表現して居るので原句を採つたのである。訂正句の「落雷の後で弟ヘソを出し」であれば作爲が其の句の汚點となるに反し、原句であればその現象が至極自然に描出されて居るので、その内容から出て來るユーモアが靜かに我々に迫つて來る様に思ふ。つまり「ヘソ出して立つてる」で子供の無邪氣な姿を思ひ強められるのと、單に臍を出して居ると云つて臍に力を入れたのとの相違を思はせられるのである。何れにしても調子から來る欠點が此句を優れたものとして居ない。何時もの作者はもつと、よりよき句を示してゐる。

近作柳樽　ひろし提出

落雷の後弟がヘソ出して立つてる

海洋人

ひろし――變つた句だ。弟の無邪氣な様が思はれて、ユーモア味もあると思ふ。かなり大膽な手法で特異な句として目に立つ。

山雨樓――大膽といふよりか、荒削りな叙法であるが、此句から受とる内容は「落雷の後で弟ヘソを出し」としても現はされるのではないか。夫れを殊更冗漫な口語体を撰んだ事には餘り感心來出ない。

ひろし――そうした表現では此句の持つだけの魅力は出ないと思ふ。此句を單に落雷の後で臍を出して居たと云ふ事實の報告と見る事は當らない。

山雨樓――けれ共此句からユーモアを見出すとしたら此句の持つ事實より他に取立てゝ云ふ程のものもないやうに思はれる。

ひろし――此句の特異さは此ぎこちないやうな表現法にあるのではないのか。同時に未完成なものとしての缺點も無論否まれないと思ふ。

山雨樓――此句の様な句材を、より新らしい見方で生かすとするならば、其處に句主特有な着想、批判、と云つた様なものが捉へられて居なければならぬ。例へば弟の臍が出臍であつたと云ふ様な點を持つて來なければ平凡な事實と見られても仕方がない事になりはせないか。

ひろし――内容的に此句が特異だと云ふのではない。雷サンが臍を取ると云ふ事は昔からの古い話で寧ろ陳腐に過ぎる取材である。夫れを此作者が獨特の叙法によつて生かして居るのは作者の個性を充分出して居ると云ふべきである。

山雨樓――そうです。僕も此作者の優れた素質を感心して居る一人であります。寧ろ此句の様な素材を大膽に捉へた事は、句主の素直な歩み方として稱揚したい程である。

町二――何としても内容が淺い。同じユーモアであつても、もう少し深みが欲しいと思ふ。チヤプリンのゴールドラッシュの中で雪に閉籠められた小屋の中でチヤップリンの姿が相手の眼には鶏に見へるシーンがある。表現の方は笑はずに居られない喜劇である。が物語つて居るものは深刻である。川柳がもし芥川龍之介の鼻や其他漱石の諸作にある様な滑稽乃至ユーモアをエキスして表現出來たら素晴らしいと思ふ。

路郎――それは出來て居ると思ふ。唯多くの優れたる作品がないだけであつて、創作にしても龍之介や漱石の如き作品がそれ程さらに無いのと何等變らないのである。私等から見ればそうした文壇の作品に匹適し、時により以上の句がないこともないと云ひ得るのである。が世間の人達が短詩型にそれだけの價値を感受して呉れない恨みがあるのを遺憾とする。

山雨樓　出

死ねる仕度が出來て居るか
と空は澄み　雅幽

山雨樓――句は作者の魂を表はすと云はれるが、雅幽氏の句には妙に僕の魂が慫付けられるのを覺える。秋の青い空を見て驚く詩人は今に始まつたものではないが、斯うまで突き詰めて叫ばれて見ると どつと後すざりをせざるを得ない。人生の辛味も自然の妙味も豊かに体得した詩人の心にふれる様である。

路郎――同感、ほんとうにものを觀且つ感じて行く點、敬服に價ひする

ひろし――澄み切つた秋の空を見て、これだけに人生を凝視めて居る處は實に敬服する。

紋太――作者は死ねる仕度が出來て居る人であらう。これだけの氣持を割合に親しい言葉で表現されて居る點が殊に嬉しいと思ふ。

町二――稍難解と思ふ。併し説明し盡されるやうな眞藝術は存在しない筈だから川柳が詩として難解な表現を持つと云ふ事は至當であらう。お寺の説教見たいに子供や年寄に迄解る川柳小唄になつて遊治郎の鼻先に乘せられる川柳、それは決して誇りにならない。此の句は確かに鋭い陰翳を持つて居る。斯うした行き方は又望ましいものと思ふ。

山雨樓――今難解と云ふ語が出たので、一通り自分が感じた心持を述べて見たいと思ふ。斯う云ふ句だと面白いおかしい川柳と云ふ様なものからは、かなりかけ離れた内容なのであるが川柳の持つ鋭さ、深み、と云ふ様なものが面憎い程巧みに齎らされて居ると思ふ。夏の灼熱的な生命感、或は享樂的な空氣から秋風が身にしみ渡つて來る時の心持は、世間の有樣や自分の歩みを振り返つて見る時に、そつと身にしみ込む驚きを感ずる。夫れは嚴寒の中を切る樣な寒さの中で暖を取りたい氣持とは異つた冷たさを覺えるのである、空は何氣なく眞青に澄渡つて居るが人間は限りなき寂寥と孤獨に襲はれる。その時に我々は死を想ひ到る。そう云ふ感じが我々の胸中に飛込んだ時に身ぶるいがする樣な衝動を覺えたのであらと思ふ。實に秋ならでは詠へない鋭さの樣に思ふ。死ぬるとか何とか云ふ文字は亂りに使つたとて我々の心を打つものでないが、心から感受した言葉には承服されずには居られない。

町二――そうですね。而し結局第三者からは餘す處なく説明し盡せない陰翳を持つ處に斯うした句の使命があると思ふ。此句の發散するリズムは見る人の心のアンテナに共鳴すれば無限のよさを持ち、共鳴しなければ一向面白くもなく、價値のないものになつて終ふ。讀む人の感受性如何による句である。

川柳塔　町二提出

灯を消せば秋は流れてしま
ふなり　鮎美

町二――秋は流れると云ふ一つの擬人法の句ですが夫れが目立たないで すつりきとした感じの句になつて居る點をよいと思ふ。擬人法は下手にやると露骨で下品で見るに堪えないものになり、俳句には此の可否は極端の句をよく見ますが川柳にもそうしたものが往々見出されるので此の句を提出して見ました。

ひろし――擬人法だとは思へないが、秋の淋しさを詠つた感覺的ないゝ句だと思ふ。

山雨樓――僕は寧ろ心境の句でないかと思ふ。秋が流れていつたと云ふのは淋しい冷や

かな空氣が鮎美氏の溫かい家庭の內に吸込まれて仕舞つたと云つた樣な境地で此句の裏に溫熱に滿ちた句主の蟠りない純化された心持が含まれて居るものゝ樣に思ふ。其意味に於て秋は流れたと云ふ叙法は感覺的であるかも知れないが心境を詠つたものとして受とりたいと思ふ。

ひろし——流れて仕舞ふは淋しい秋でない樣な氣持がすると云ふ意味ではないと思ふ。僕は灯をけしたので一層秋の氣持が深められて行く氣持ではないかと思ふ。

紋太——僕も流れてしまふは心氣一轉した謂ではないかと思ふ。又異つた秋を感じて居るかも知れない。灯を消せばと云ふ事は未來ではあるが此の句では灯をけした後の事になつて居る。「せば」と云ふ反對に「せれば」と云ふ事ハ思はせてよく失敗に終るものであるが、此の句ではそんな理屈の餘地がなく素直に上品な句になつて居ると思ふ。

山雨樓——けせばは必ずしも未來の言葉でないのでせう。消して見た處がと云ふ樣な意味にもとれると思ふ。そして此の場合には過去と見た方が至當であらうと思ふ。

紋太——後の言葉が強いからそう云ふ意味にもとれると思ふ。

ひろし——此の場合には「灯を消したら」と云ふ意味だと思ふ。

路郎——「秋が流れる」と云ふと秋の感じが其處へ彷彿とする……しみ渡る意味にとれる。處が「秋が流れてしまふ」なりと云ふと秋の感じが消えうせたと云ふ樣に容けとれる。此作者が秋の感じに深くひたつて居た、そして灯を消した、處が今迄自分のひたつて居た秋の感じがさつと流れて消えうせて仕舞つた、その時の氣持は一入淋しさが迫つて來たと云ふ作者の心境を詠つたものではあるまいか。

山雨樓——僕はその淋しさのうせ去つた後へ入れ替りに溫いものが感ぜられたと云ふ風にとりたい。夫れは所謂家庭の溫味と云ふ樣なものでないかと思ふ。

ひろし——それなれば妻が歸つて來たとか或は母親の聲でとか云ふものが出て來るのではないかと思ふ。

路郎——灯を消して秋の淋しさが消えうせて後へ家庭の溫味が來ると云ふ事は何うも受とりにくい。寧ろ灯をつけずに秋の淋しさを味はつて居た時に偶々灯をともした處が秋の感じが流れて仕舞つたと云ふ事が常識の樣に思ふ。灯をつければ家庭の溫味がそこに現出すると云ふ事は誰しも想像し得るが灯を消せば其後へ家庭の溫味が感ぜられると云ふやうな場合は想像し得られない。

紋太——此の句は其處迄いつて居ません。現在が終了したせつなの句だと思ひます。

町二——私は此句を擬人法と思つたのは秋と云ふ自然そのものが流れると感じた作者の主觀が優れた一種の擬人法となつて象徵せられたと思つたのであつて、擬人法の定義乃至解釋を樹立せなければ斷言は出來ないので其點は保留したい。

紋太提出

西瓜より輕い男の子が生れ

雪峰

紋太——人生の觀方に輕く明るい見方があり、暗く重い觀方があり、滑稽にも悲慘にも浮薄にも種々の觀方があつて、夫れから生れる句が種々に變つて來る譯だと思ふ。此の句は輕く明るい觀方から生れた句だと思ひます。それが決して浮薄なものではなく、しつかりとした立場にある作者を思ひます。「西瓜より」とありますので夏期に生れたことを思はせる點等も巧まずして表はれて面白いと思ひます。

路郎——隨分褒めちぎられたが褒めちぎるだけの巧みさがあると思ふ。多くの場合二つのものを比較するのに「の樣に」と云ふ套常語を使ひたがるがその欠點から逃れて居る。それから「のやうに」比較したものが懸離れてこそ其處に面白味も出て來るのであるが「のやうに」の常套語を使ふ人達は餘りに接近した類似の素材をならべ立てるのでピンと來ない點で感心させられて居る場合が多いが此の句等は割に手近な品物ではあるが西瓜と男の子と似ても似つかぬものを比較して句をなして居る點は作者の手腕を認めなければならない。

山雨樓——僕は生れた子供の頭が割合に大きかつたのではたから見て居ると西瓜の樣なと云ふ感じが浮んで居つたところが愈々其子を抱上げて見ると案外輕かつたと云ふところに面白味を見出したのではないかと

思ふ。併し叙法から見ると「子が生れ」と云ふ下五は稍概念的な感じがする樣に思ふ。

ひろし――輕妙な句だと思ふ。やがて丸々と太つて重くなり手に餘る程の腕白ものになるであらう男の子も、生れた時には西瓜よりも輕いと云ふ事は實に面白い發見だと思ふ。

町二――紋太氏の言はれた西瓜と云つて眞夏の誕生である事を示し、先生の云はれる取合はせの妙と云ふ事が此の句の價値であらう。私のやうに滑稽やユーモアを生みゞない男には出來ない句だ。

紋太――僕のとり方は山雨樓氏の樣ではなく此の句を讀むと其日或は前日位に西瓜を取扱つた亭主を思ひ、そしてまた男の子を得た喜びにある男親を想像させます。唯見たゞけであれば西瓜より小さい でもするかも知れない。輕いと云つた點に男親の喜びが一層強く出て居ると思ふ。此の句が巧まずして溢れ出た如くに叙されてある點がいゝと思ふ。理屈を云へば何んな西瓜だとか目方の比較等も云ひたくなるであらうが輕く明い境地から生れる句には そうした理屈を容入れる隙がないと思ふ。輕く明い境地の句は叙法の推敲等に意を用ゐぬのが常である。其ために讀返し味ふやうな句は少ない欠點がある。

路郎提出

大おでこ小おでこならべ　天瓜粉

閑生

路郎――此句を一讀して凝つと見てゐると思はずニンマリとほゝえまされる。唯大きなおでこと小さなおでこと並べただけであるが夫れだけでこゝに詠まれた その子供の家庭が彷彿として浮んで來る。細君のおでこも想像される 家庭の圓滿さも想像される。貴族的な生活でなく中産者らしい ところも窺へる。細君の額の汗、割烹着等も思はれて此の句の表現がもつ妙味に敬服する。此の句も又何等の巧みのない處に佳句となつたものである。

ひろし――漫畫になる川柳には 餘りいゝのがないのが常で、川柳とはこんなものかと思はれる心配を絶えずして居るが 此の句等は漫畫にされても少しも恥かしくない 佳句である。

路郎――漫畫の話が出たが 成程川柳を漫畫にすると云ふ事は川柳家にとつて 一種の懸念が伴ふものである。一概に川柳を漫畫にする事を排するのも狹量過ぎるが 併し川柳を眞に解する漫畫家の筆にならないために多くの缺點が生れるので、この點は漫畫家の考慮を煩はしたいと思ふ。尤も漫畫になるならぬと云ふ事は漫畫家のあたまや 腕にあるのである。川柳家も俗世間の喜ぶ樣な所謂漫畫になる句を目ざして作句する樣では 到底今日の川柳を語るに足らないのであるから、その點は深思しなければならない。

町二――此の句を漫畫にすれば 漫畫家はおでこを誇張して笑ひを強ひ 樣とするであらう。此の句を讀み下す時小おでこのあたり、舌がもつれる讀みづらさがある樣に思ふ。

山雨樓――此の句が一見何等 巧まずしてすら〳〵と生れたものであると云ふ 見方は叙法に苦心をせなくても佳句が 生れるものであると云ふ早合點をされる虞があると思ふ。此句の場合でもこれだけの撰ばれた 言葉をもつて來るには可成の苦心があつた事であらうと思ふ。殊に名詞止の句はよく出來ると一層引立つのであるが得てして 拙くなり易いものである樣に思ふ。つまり着想とか技巧とか云ふもの以上に心持をとらへる、そして其の心持を生かすと云ふ點に注意を 拂はなければならぬと思ふ。此の句等は決して無造作に出來たものではなく 日常のありふれた生活還境の中から句主の詩情にふれた エキスをとり出す事に可成り苦心が 拂はれて居るものと思ふ。

紋太――大体に山雨樓氏に同感します。一應は漫畫を想はせる句であるが 漫畫に表はせないものを持つて居ると思ひます。面白い叙法であつて面白い丈ではなく溫か味と 人生の重荷を考へさせるものがあります。漫畫になる句が漫畫に助けられたり、漫畫に負けて仕舞つた句が多いので、多大の杞憂を抱かせるのでありますが 此の句は漫畫を添へても作者の感情が嚴然として立つて 居るので決して漫畫を添へた爲めに 面白いだけでは濟ないと思ひます。

路郎――從來川柳は無季の 俳句とまで云はれた位に季と云ふものを一つの 約束としない自由詩であつたが近頃の川柳 殊に本誌の句を見て居ると 所謂俳句の季を含んだ句が可成澤山ある樣に思ふ。現に此の天瓜粉、前

（二十九頁へ續く）

柳壇の人々

【4】

麻生路郎

前田雀郎君

前田君は所謂新しい川柳が嫌ひであると常に云ひもし書きもしてゐる。そんなら古い川柳が好きかといふと、そうでもない。所謂川柳といふ名に囚はれて、動きのとれないのが嫌ひなのである。

要するに君は、句（十七字詩）を作りさへすればいゝので、作つた句が、所謂川柳であらうが、なからうが、それが、所謂俳句畑に足を入れてゐやうが、そんなことはどうでもいゝ、俳諧の精神と同じで極く自由なしかも素の風流に遊びさへすればいゝのだと主張してゐるやうである。

○

この主張に對しては多くの異論を持つ人々があるかも知れない。けれども異論があるから前田君の所説が全然間違つてゐることは速斷し難い。と云ふのは、短歌が技巧に墮落して萬葉の精神に還ることの眞であるならば、川柳も技巧に墮落した時、川柳のよつて胚胎した俳諧の精神にまで引戻すことは眞であり得ると云へるだらう。現代の歌人にして往々萬葉の言葉やその技巧に囚はれて萬葉に還れと叫んでゐる人々のあるやうに、單に川柳を俳諧の姿に引戻すの意でないことは前田君の所説から充分に窺ひ知ることが出來るからである。こゝに君の一家見の存在の價値がある。

○

君は曾て柳誌『みやこ』及び『昭和川柳』の盟主として東都柳壇に重きをなしてゐたが、その機關誌を失つてからも、都新聞の柳壇に立籠つて、昔日の貫録を維持しつゝある。

今日、君の創作はあまりにも、寡作だと云はなければならないがその所説の素の風流による創作だとすれば、所謂傳統的戯作的作品に比して遙に寡作であることは當然だと云はねばならない。その後

の君は作家といふよりも、寧ろ研究家として批評家として『きやり』『雀』『川柳雑誌』等に執筆をつゞけてゐる。

○

前田君の句風を見るためにはいさゝか古いといふそしりはまぬがれぬかも知れないが、その尤も心血をそゝいでゐた柳誌『みやこ』（大正十五年迄出てゐた）から抜くのがよくはないかと思ふ。

戀ざめのしみ〴〵家の灯に坐り
頸筋に友の若さをフト見つけ
膝の淋しさに子供を思ひ
朧の街へつゞく石蹴り
たまさかに穿いて袴の手のやり場
松の内下駄の憐れは本を讀み
探してたものを梨地の艶に見る
面白くつて鐵瓶下ろされる

すべてが、ふくよかな柔かい感じのする句である。所謂尖端的な激越な句やグロテイックな句にはぶつからない。何處までも輕ろくして自由である。

○

前田君は小柄である。お洒落である。すべ〳〵した顔に厚い唇が特に目立つすべてが地味好みである。年より落着いて見えるのもそのせいかも知れぬ。顔色は淺黑いうちにも赤みを帶びてゐる。

○

君の言行には何等の奇がない。その大向ふをうならせるほどの快腕はもたないのであらうが、若實さ眞摯さを把握する力に至つては君の歩いて來た足跡を一瞥すれば直ちにうなづけるであらう。

○

川柳以外の趣味を訊かれて、『酒に醉へず、女に醉へず天性の不器用はこの一節につながる』と答へてゐるが君の假聲を知るものは君が云ふが如く天性の不器用人でないことを證明してあまりがあらう。

○

前田雀郎君、名は源一郎榴花洞はその別號である。川柳にはじめて指をそめたのは君の十九歳の時で、廿二歳にして久良岐門に入り間もなく破門となつたと聞く。職業は新聞記者、年は三十四歳、愛妻と差し向ひの生活。居は東京市本所區向島にある。

（寫眞は最近の前田雀郎君）

川柳塔

□□□

○　家賃滯納　安井ひろし

拂はぬときめたぞ家主やつてこい
あてにした間貸の代もはいらない
寢るだけに家一軒はもたない

國勢調査

失業を消されてはと國調何を云ふ

就職の話

働ける氣になるまでを待ちくれず

教會にて

僕がほんとに迷へる羊です

○　松盛琴人

滿月や泣く人あるを疑はず

青森へ行く從弟を見送る

驛の灯へ青森行を寒く見る
つくづくと貧乏がながい秋の顏
決心の涙を拭けば蒼白し
沒落の袷がほしい夜風なり
童顏へ山寂として一人もの
タイヤの風によろめける失業者

○　太田朝陽

田舍の祭黑朱子の酌
青林檎家へ土產の父となり
大丈夫何んぼ呑んでも父だ父だ

○　松丘町二

振返る霧の中から鎌が鳴る
わが童心の團栗の獨樂
後つける男をろかやブラタナス
煮凍りへ饑じき箸こなつてゐる
親馬仔馬地に影ひいて
晝の月この情熱を捨てよこか

九月二十五日佳き友橋新君大阪を去る。

天保山埠頭

友の顔眼鏡こなつて遠ざかる

○　出口雨町

淋しくてぬけば簞笥の笛が鳴る
犬死がいやでめそ〳〵生きてゐる
手を出せば金はないこの御挨拶
一膳めしやに秋なすび哉
セルを着て行けば彼女もセルで居る

秋　三　章

抽斗の中にも秋を見つけたり
秋風吹いて机の上に何もなし
秋の夜は悲し片眼の犬張子
桐の葉の一つ大きな影の晝
丸髷の重たさを知るものおもひ
父のない子には冷たきたゝみなる
使ふ身こ使はれる身が碁を圍み
資本家は首切る時機を見逃さず
搾取した財産があり鍵があり
一片のパンこバイブルこをくらべ
失業の人は芋を洗はされ
菜ッ葉服女給に力瘤を見せ
金持に手くせの悪い子が一人
退院はもうきつちりこ帶を締め
不幸あり柱時計が止つてる

○　住田亂耽

麻雀を誇大妄想狂こ打ち
靴下がずつてる戀の女優にて
秋風を味ひながら男待ち

○　中島鐵洲

朝拜にまだわだかまり消えてゐず
就職の今朝は雀も軒に來た

○　伊藤綠之助

君よ何こいふけちな不平だ
つまり黴のやうなサラリーマンよ
酒が見せてくれたお前の眞面目にて

秋になれば死んだY子を想ふ

思ひ出の丘に今年も曼珠沙華

○　水谷　鮎美

迷ひ子のはつかねずみにさも似たり
しとゞ降れ〳〵しろき雲あり
鼻ひくき處女の讃へるキリストよ
白蓮や紅蓮が珠數の手に剪られ
落椿蟹ははさんで逃げてゐる
魂も雨にぬれたり善きこゝろ

○　朝田　新水

母にみな洗はしてゐてタイピスト
大阪の鏡にうつる白髪を見
スピードよ轢かれてならぬ子を急かし
單線へ向ふから汽車の見える夢
愛の巣へ今日運ばれる椅子二脚
期待した兄鐵工の姿なり
美しい母に嫉妬のあればあり
雜沓に我が足さへも見出せず
縫ひながら八百屋の品に腹を決め
兄だけが喰ふ洋食へ母は立ち

○　酒井　駒人

みな秋の色になりきる果物屋
ひまごつた仲居が置いて行つた本
母の氣になつて今夜を家に居る
よく稼ぐ男女に裏切られ

湯河原

伊達卷のまんま湯の街局を聞き

○　關本　雅幽

澁柿の何憶ふてかなりもなり
秋の汗そのまゝ金になるらしい
一昨日の事も昨日の事も酒
うぐんやで同性愛となる夜寒む
特高課馬鹿正直を叱つて居
鍋の尻ばかり焔はなめて居ず
閉めきつて子佛と居る暑いのみ

○　高橋かほる

浪花節乘り込むとこが聞えて來
戸袋の網代の艶も秋の色
音ばかりして今動かないオートバイ
十二時に歸つてのろけきかすなり
夜店の本買ふ氣になれば手暗がり

○　伊藤　愚陀

剃刀の刃から生れたノンセンス
彼女自體を白粉にまで進め

○　橋本　綠雨

金貨はまばゆし握るは夢なり
運命と片付けられてあはれなり
失業にこの土塀がしやくに也

儲かるの儲からぬのと大阪よ
人間がうるさくなつてホテルに居
重役は搾るばかりに椅子にゐる
不況會社糸が亂れた樣なもの
祝酒栓のゆくへが知れぬなり

◇　揚井　二一　南

凡才とあきらめてゐる兄の旅
奏樂に和食をとつたことを侮い
腰掛のつもりですとはもう言はず
獨占の女へ秋の蠅がゐる
友達の戀なか〳〵に捗らず
黑髪に戯れるのを許される
女もうロイド眼鏡を寄せつけず

東西大歌舞伎所見

花道に辨慶の幅見えて來る　安西杏三

◇

賣るものがないかと思ふ病上り
ウエートレス皆んな唱へば寂しけれ
茸を喰ふ度胸を持ちし我が祖先

友の結婚

奪ふものさがす男の二つの眼　中澤濁水

◇

この奥でバガヘダイカへいたします
干竿に年頃の娘を見てはいり
二次會は「お話中」で廢しになり
床屋暇大臣らしく椅子で讀み
番臺の嫁の案外無愛想
空瓶屋殺風景に灯に光り

◇　阿部閑生

荻のかげ七面鳥がとがつて居
鏡見て亦鏡見て十八九
砂つけた赤い脛して露の道
灯に首を鳩めて外は暴風雨
今歸りけん二階の窓灯る
豐穣の籾を一粒嚙んで見る
氣短かで氣弱で父に似ています

◇　川村觀月

財布からくれたお金の有難し
大金のまへに寢ころびたき心
人間の姿四ツ這ひにもなれり
やうやくにお辭儀の出來る子となれり
預金帳九十五圓となりにけり
尼さんになるとは女恐ろしき
只一人大阪驛を出たもの丶
相撲取りやめたら何をするつもり
内風呂で小鳥を飼ふかと思ひ
常識のないのが風呂の水を浴び

寢ころべば誇大妄想狂になり
錠前をこさへるだけの智恵もなし
腕一本へちゝはゝ妻や子がすがり
世の中へ岬の如く生きんかな

中見光路

◇

通勤の足ごりのまゝ廊をぬけ
重寶な馬の尻へも傘でよけ
まあお待ちそう云ふたかて買へんがな
嫁いでなんこ世間の狹さ
この邊り立小便の音で更け

丸山公二

◇

誰やらが咳きながら軒を行く
編柄の小言を言ふも衣更
女中部屋耳をすませば國の事
世を拗てゐるが住居にうかゞはれ
借金をしてまでもする冬仕度
めざむればまだ足音のする夜長
俗物の金歯は神樂獅子に似て
母娘二人を笑はしにくる

熊本黄峨

◇

裏切つた女こしては地味に着る
酒ぐせを案じて旅の留守をゐる
候補者には水平線下にある私
長男は主義者こなつて家をあけ

西村明珠

◇

山程の金があるのに罪に落ち
泥鰌汁ます〳〵寒さ身にしみる
ゆるりつこ歸れば客がまつてゐた
叱つても居れずに朝の靴をはき
看病をする身も明日が判るかい
大將こ呼ばれあたりを振り返へり
ドライアイスの話も出たる水枕
段梯子叱られて來た音で下り

越中今雨

◇

足止めこなりし二錢の昇給よ
失業者饑餓線上に立ちすくみ
ごの歯車がいらぬでもない輪轉機
賣出しへ世はふごころ手ふごころ手
氣おくれなこばつかりが惚れてゐる
紅唇をやす〳〵かすも戰法
家中の足袋こて二足買へば足り

平井蒼太

◇

白粉の腕に覺へがあるわいな
幸福をもたらせ給へ郵便夫
紅燈に浮ける素足のまるやかさ
たゞ熱を買ひ給へこ投げ出し

◇　藤岡櫻果

店子絞ぼつてしかも脱税
大水の蟹高下駄へ挑むなり
松蔭に娘カンバス母絽ざし
秋の風お久し振りの風呂で逢ひ

湯桶製作を見る

こゝいらが六甲山か桶の底
片ちびの箒へ心すいて見え
買ひたい氣しかし肴の名を問へず
救助船見付けた樣に職があり

菜寫眞館開業

賴まれてカメラに向ふ美しさ
人を泣かせた金で卒業

天王寺公園で

草に寢るつもりへホース無情なり

中山寺奥の院にて

老いぬればこう暮したい山の寺

◇　日野華水

優勝旗まだ緊張の足が合ひ
俎板の傷がうれしい赤てがら
負かし得る力があつてゐくほなり
世帶持つつもりへ貸家札があり

◇　河野双車

或る時は米の白さもうたがつて
なんぼなんかて白粉ぐらいつけてくれ
醉眼へ殺風景な矢塲が見え
ポツカリとポストが立つてゐる日中

◇　須崎豆秋

風秋の中へタクシー指を出し
たゞのよな鉢へ毎朝水をやる
鼻先へおしめが映る兩眼鏡
兩頰をすぼめて老鼓煙草喫ひ
奥さんと食ふ洋食は身につかず
家内のとかうもり傘を二本提げ
いゝ天氣ほめつゝ旗を立てるなり
ポケットへ乘換券を入れて呑み
舅御のヘボを相手に將棊さし
合服の向こ脛寒き虫の孔
髪刈る間謀叛がうかびニットする
見てゐると夫人朝日を出して吸ひ

◇　上野錦水

まだ寺の名はなくて釣鐘
一口に言へばおいらが駄目なのさ

◇　櫻井圓角

國調に載せともないほど嫁き後れ
色街出言はせまいこの粗服なり
エンジョイの中に染まない獨りにて
氣の附いたことはそも〳〵端つポだ

◇　木村晃卓

牛乳の榮養うたがふまでに痩せ
寢煙草の何思ひきや眼をつむり
超然として貧しさへなれて來る
いともやさしき夫となりぬ
人前をかくす笑ひとなりにけり

◇　生田翠夢

髪道具一杯にして母を呼び
ふと秋を女の髪に感じたり
秋ふかみ菊の植木が二十錢
皮帶の金具ばかりが光つてゐる

田中凡骨改メ喜多春秋

◇

社交家の廣い額が光つて居
子を抱いて野球放送聞きに來る
女學生あらアと逃げる時もあり
うんと云やあしたからでも若夫人
良心といふプレイキがあつて無事
汽車で寢る女上手に足をまげ

◇　池田雪峰

かつこうの惡い洋裝なぞおよし

工場風景（三句）

妻はけなげに社長の宅へ
同志の爲めの餞がこわくて何とする
モーターが廻ふ恩を知れ俺を知れ

◇　三好計加

夕立に二階の間借り首を出し

◇　植田湖舟

生きて居ることが氣兼になつてきた
やさしいなかにも敬遠主義が見え
五尺三寸四十キロの男にて

◇　西田草樂

上京の此の頃はもう富士を見ず

◇　山本凡々子

鮮人の言葉忘れた樣にゐる
死を語る女ごゝろを叱りしが

粒々集

○　御影　長崎柳秀

嫁となる娘を見たい床の母
金とエロに渦まく巷灯がともり
奢る價値あるにほける色男
死に水をとつて不孝の罪を消し
いやですときつぱり振つた派出な袖
お氣分をきかれて困る二日醉
ありの儘出すは女給の晝姿
今にして思へば熱のたらぬ戀
空想を信じて妻のよく動き
慰さめて呉れる男は金が無し

二つのどろぼう

—日記の一節—

川村花菱

九月十五日。うすぐもり。

朝から書齋で二幕目を書く。午後二時頃、隣の家の庭で恐ろしい罵聲こうなり聲とがきこえる。近所の空地に家が立つので毎日トラックがコンクリの材料を運んで來る。その人達のけんかかと思つたが、あまりはげしいので出て見ると、白服の二人の交巡査か、シャツと股引だけの若者と格闘して居る。ほんの二三人しか見て居ない。やがて、巡査は、その男をおつぷせて、細い繩をかけてうしろでつこに縛りはじめた。繩を首へかけては、ぎゆう〳〵ひつぱると、若者はウー、ウーどうなるなか〳〵うまく縛れない。素人が荷造りをする やうにしてやう〳〵に縛り上げると、若者はうごかなくなつた。

『こいつ死んだふりをしやがる、君大丈夫だよ』

一人の巡査が云ふと、殘つた方は、ウン、ウンとしきりに活を入れて居る。

『死んだふりだよ君』

私は何故か『狸ぢやあるまいし』と思つた。ほつとした巡査が顔を上げると、私の見知り越しの巡査で、汗が玉のやうに顔中に流れて居た。

『此所の庭がすべるんでね』

誰れに云ふともなしに巡査は云つた。その巡査は、ずつと前に戸籍調べに來て

『お前の商賣は一體何だ？』

と大柄に云つた。その云い方が癪にさわるので、こつちもぞんざいに『作者だ』と云つてやると、よく飲み込めないので、芝居や活動の本を書くんだと云ふと

『さうか、蜂須賀小六はお前が書いたんか……？

と云つた。いや、あれは己れぢやないと答へると、一體一冊書いていくら位くれるんだと云ふ。

『まあ三千圓から五千圓かな』
中腹じ恁云ふと
『ふーん、隨分取るな……』
『それでも安い位だ、外國ぢや一つ書けば一生喰へるんだからね』
『ふーん、でその三千圓すぐ呉れるか？すぐ拂ふか？』
こんな對話をして以來、私共一家では、それを蜂須賀小六と云つて居る。
今、その小六が賊を捕へたと云ふと可笑い。二人の巡査はその男を連れて行く。帽子と板ぞうりが落ちて居るので
『帽子が落ちてるよ』
教へてやると『ありがたう！』と拾つて行つた。道の角に自轉車がたほれて居る。それも持つて行つた。
事件は、かつぱらひで、そこまで音無しく一緒に來たのが、町の角で急に逃げ出した結果だとあとで知れた。

○

その事件を家のものに知らしてやらうと思ふと、家内は子供を連れて水道の土手に遊びに行つたと云ふので水道に行く。
百人ばかりの失業者見たいな人が、萬年たわしや、ほうきを持つて、水道のコンクリを洗つて居る。水はほとんど流れて居ない。コンクリのふちにたまつた水あかを掃除して居るのだ。
小さい魚がうんと死んで居るのを近所の子供が捕つて居るが、巡査が來ると、パアーと一散に逃げ去つて仕舞ふ。
一人の男がバケツをさげて巡査と一所に歩いて來る。バケツの中には死んだ魚がごつさり居る。その男は、人人なるが故に巡査に捕へられたのだと思ふ。
巡査は、手帳に名前をつけて去つた。とそばに尻切半てんを着た、恐ろしいのつぽの男が居て
『本當の名前なんぞ云はないで、いゝかげんな事を云つて、早くづらかれよ！づらかつちやへ』
恁云ふやいなや、そばに居た老役人と云ふやうな洋傘を持つた背廣の人が『コラツ！といきなりその男の胸ぐらを取つた。
『已れは刑事だ、何だつて餘計な事を云ふ、そんな事で世の中が渡れるか、人の事なんざ、怎でもいゝぢやないか』
のツぽは、急に眞青になつて、ガタ〳〵〳〵ふるえ出した。實によくふるえた。色も完全に眞青になつた。尻切半天からニヨキンと出た長い足が、音をさせてふるえて居た。
『ふるえたつて駄目だ！お前も涼ましてやる……家は何處だ』
『つきあたり』
『つきあたりぢや分らない、何番地だ』
『八番地』
『商賣は何だ』

『タキツケヤ……』
『タキツケヤだ？馬鹿、いくら商賣だつて、お前は餘計な事をたきつける奴があるか……』
刑事は思はず失笑した。私も何と世の中は面白いもんだと思つた。そこへ巡査が來た。
『こいつ連れてつてくれ……なアに、己れの居るのも知らないで、づらかれつてたきつけやがつたんだ』
『馬鹿！はつぴを着てる者ばかりが巡査ぢやないぞ！その爲に刑事があるんだ！』
巡査は怎云つて二人を警察へつれてつた。阪を降りきる頃
『おい、二人一所だから、途中でづらかれるなよ』
刑事は大きい聲で云ふと『大丈夫だ！』巡査は笑ひながら連行した。
……
夜中に便所に行く。庭をへだてた隣の家の窓にも窓にも灯がゆらいでゐた。
病人がいけないらしい隣の灯
こんな事を腹の中で云つて、寢所へかへりながら、子供部屋に寢て居る家内に聲をかけた。
『おとなりの何は、いけなくなつたらしいね』
『えゝ、私もさつきからさう思つてるんです……さつき、窓に坊さんの頭のかげが二つうつつてました……』
『おやすみ』
『おやすみなさい』

創作奬勵 懸賞川柳

募集の言葉

川柳の社會化運動といふことが徹底的に解つてゐないために、ある人々を感違ひさせ、大衆に媚びることによつて、作品の低下を招來しつゝあります。これでは從來の誤られたる川柳觀に屋上屋を架するもので、心ある者の默視するに忍びないところであります。本社は茲に見るところあり、弘く社會より良き作家の作品を募つて創作奬勵の範たらしめんと念品を贈呈することにいたしました。奮つて應募されんことを切望いたします。

課題「喜び」

選者 瘋生路郎氏

賞
一等 貯蓄債券（拾圓券）
二等 同（五圓券）
三等 川柳雜誌（壹年分）

佳作若干名 記念品贈呈

句數 一枚五句以内（但一人にて幾枚投するも可）

用紙 「川柳雜誌」十月號より毎號添附の投句用紙に限る

締切 昭和五年十二月五日限

發表 昭和六年新春特輯號（一月一日發行）誌上

投句所 大阪市住吉區杭全町六〇三 川柳雜誌社内 創作奬勵懸賞川柳係宛

（十七頁よりの續き）

句の西瓜、其前の秋、それから最初の落雷の如きは何れも季を含んで居り、死れる仕度の句の如きも又秋の空を思はせる點期せずして五句が五句共季を含んで居る事を思ふと川柳の作句と云ふ事が單なる穿ち本位の既成川柳型を脱したと云ふ事が出來る。近頃鮎美君の句の如きは殆んど九分通り俳句の季題をかりて詠んだと思へる句が多い。其のために餘程しつかりした川柳の境地を掴んで居ないと、俳句と似て非なる處へ落ちて行きはしないかと思はれる。川柳は何處迄も季と云ふものに煩はされずに自由に詠まれたい。尤も森羅萬象が句の内容をなすのであるから自然に流れ込んで來る季感を無視するものではない。偶々今回の撰まれたる五句に季を含んで居つたので一言述べておくのである。（杏三筆記）

近作柳樽

ひろし選

ぬら〳〵と黄昏れ終へる施療院　別府　砂城

土砂降りへ何か氣のすむ失業者　同　同

（評）施療院の慘めな空氣を思はす句である。ぬら〳〵の表現巧み「ぬら〳〵黄昏れ終へる」と強く云ふよりも「黄昏るゝ」の方可ならんか、佳句である。

失業者にとつて快晴の日ほどたまらぬものはない。雨でも降つてくれゝば、いくらか氣の安まるものだ。「土砂降り」は幾分大げさの感がある。

病院の塀越しに柘榴の赤い花　香川　三汀

夫の厚司洗ひ終へたり飯焚かん　同　同

（評）若き妻の働き甲斐ある生活をよく詠ふて居る。やがて夕餉の卓上には妻の丹精になる山海の珍味にも勝る手料理が並べられるであらう。夫も一日の勞苦を忘れて語るであらう團欒の夜が羨しい。

こゝろもしてあゝもする氣であつた父　大阪　鶴峯

慰めて呉れるつもりの一句かな　同　同

（評）前月の句と同じく愛兒を失つた父親の感想で、慰めようとされるのは、つらいものだ。

晝も鳴き夜も鳴くなるキリギリス　蛍ヶ池　銀花

疲れてる時計へねぢを掛けてやり　同　同

（評）キリギリスに托し、時計に托し作者の深き愛を味ふて居る。

「疲れてる時計」まことによき言葉なり。

欝憤へ首振つてゐる煽風器　島根　龍村

まだ悠氣する氣か白髪染めるなり　同　同

（評）器械は無情なり、非情の煽風器の知つた事でなくとも己がつとめと首振るをみては、人生また敎へらるゝを如何せん。

「まだ悠氣する氣か」するどき皮肉

髭なりこ剃つてやつれを隠そうか　明石　靜美

盆送りして

朝の濱吾子の華も並んで居　同　同

（評）新佛として迎へた吾子の思出に涙は新らたである「並んで居」はいま一息の工風を要す。

出戻りの姉嵩高い臺所　大阪　規堂

獨り身のほころびを縫ふ背のまるさ　同　同

（評）獨身の淋しさがよく出て居る。

赤蜻蛉命がつきる秋を舞ひ　吳　落葉

（評）命數のつきるを知らず踊り狂ふものあに赤蜻蛉のみならんや

秋の日はよし桑摘む赤だすき　島根　夢二

（評）朗らかな田園風景。「何々はよし」は濫用してはいけない、心すべきである。

父の忌

寫眞帳其の頬骨の高さにも　東京　桐竹

戀を知る顏のまるみこ誰が知ろ　愛知　青笛

（評）秘めたる戀こそうれしきもの、然してまた語りたきものである、げに戀は曲者なり。

友愛結婚の淋しき夜こなりぬ　大阪　影人

（評）ものたらなくなつてこそ求める心が起り、はじめてそこに與へらるゝのである。新らしき女も、やはり女は女なりだ。

案内を乞へば蚊帳から返事する　長野　道樂

男あつての生活こは思ふてず　大阪　正博

夕ざれば一人歩きのはかなさよ　愛知　巧笑

夜學の子寂しい影を持つて居る　大阪　惠宣

蚊帳の釣手の音してるへ子が寢つき　長野　蛙皷

落成の其日は元の失業者　大阪　吟風改メ芳村

体温表こつちのものになつた熱　奈良　右月

足並をそろへて歸る新學期　大阪　勢洲改メ水鈴

もう一度寢顏に言つて乳母は去に　大和　一丙

（評）乳母は離さないものである。子の寢た間にと思ふが、乳母にはまたそれが心殘りでもある。古句調ではあるがいまも昔も人情に變りはない。

身支度が出來て鏡へ灯がはいり　犬山　練屋丁

天高く一坪の庭に鳴く虫よ　大阪　素月

算盤に手をつかねてる父の顏　伊丹　松好厨

裏の背戸こつそり秋が忍びよる　嵯峨　司郎

半圓の帽子小脇に俄雨　大阪　司郎

夕燒を一人唄つて野良歸り　大聖寺　一寛

寢返つて咳こなる灯へ病んで居る　吳　比呂志

母親の意見はいつか愚痴になり　大阪　笑四

出勤の途次校門に吾子送り　愛知　浮葉

田のいきれ靜かに廻る風車　大阪　黄土

しみ〴〵こ秋の香ひに夜が更け　大阪　葉留夫

柳雨翁の柳多留講義（初篇）

蛭子省二

私の書架には、翁の著書は求め揃えられて居る中に、最近の『校訂柳多留一丈けはないが、生前原稿の校正なされた、掲題の書は、同じ岩波から一圓五十錢で流石に印刷製本紙質裝幀の心地よさをもて、六月下旬机上にし得たが、翁かこの出來榮えを見ずして逝かれたのを、愚痴にはなるけれど、深く淋しさを覺ゆる。令息から『父の最後の本』とあつた。翁から私への最終のお便りでは『二篇迄脱稿、一篇約三百頁挿畫もなければ裝幀も極めて簡潔、その代り一冊八十錢か七八十錢止にて發行の積りに御座候、只今第三篇執筆中』とあるから、三篇迄は原稿になつてゐる事と信ずる。

山椒氏の『通釋』も亦三篇迄紙型に殘り、四篇は出る噂である。以下氏の知人により綴くかごうかは知らぬ。斯く全解が單行本として出るは、川柳家外にも非常な便益であつて、幾種刊行されてもよい。著者により特異な研究が示され、又前者の解説の恩惠を蒙る事に因り、完全無缺にも進むからである。

『通釋』は挿畫といひ、こつたマア豪華版式のもの、書架に飾るにも良い。然し普及版の八十錢位で、換言すれば岩波文庫改造文庫流のポケット本で、何度でも買ひ得られ、友人にドン〳〵進呈して私の如きプロにも苦痛にならぬ種のものも亦欲しい。慾をいへば翁の『講義』も文庫の内に加へられたなら、廣告のゆきわたる點からも、社會進出に好都合でありはしなかつたらうか。恐らく翁の精神はそこに存したものと察する。價の倍加したのは無理からぬ、立派さなのである

『通釋』は文字使ひを原本に似せ『講義』は讀みよく漢字に改められ、然も正しく原本の句順にせられたのは、原本を所持せぬ士に安神が出來る。殆んど誤植のないのは尊い。僅かに

衣類迄まめで居るかと母の文　（五八頁）

の一字が目に留つた丈けである。＝（註

に缺字一ケ所二六二頁）

月一篇づゝ出版の意氣込みであつたらしく、生存されなば二ケ年で、寶典二十四篇が完了したものをと、今更に大柳雨翁を偲ぶ。翁は挿畫には、かなり心を勞せられ『川柳江戸歌舞伎』は逍遙先生に『川柳參尾志』は石田先生に『風俗志』は一部を嶋村先生に『上野と淺草』は楓水先生（都合で見合せとなつたがに因つて、撰定を受けられたもの『吉原志』の分は、餘りお手近から採用せられた爲めアル一派からは兎角の評が出た。今度のは全くないのだから、氣易くあつた事であらう。中西書房からのに就ては、翁から不滿を漏らし越されたが、一圓五十錢では發行所の採算上、止むを得なからう

『講義』に對する卑見は、別稿竹馬居雜筆に讓らして頂き、茲に單に同書の紹介に止める。

『不明』として更に筆を下ろさなかつた句。

いたゞいて受けべき菓子を手妻にし禪寺は彼岸の錢に振向かす

藏入にうすく一トきれ振舞はれ上ゞ輿のあてにして置く地主の子

裏門と家中の乳母は首つ引

年男うまい咄を淋しがり

供船へお玉の類は撰り出され

言名附ケ互ちがひに風邪を引き

請狀が濟むと買ひたい物ばかり

大磯は鉄落するに悪いとこ

御傳馬で行けばやたらに腹を立て

四里四方見て來たやうな新茶賣

淺草の鏡に千の姿あり

日の暮に高輪の戸は惜しくたて

悪筆で仕舞の方へ痴話を書き

大磯の落馬は直ぐに煙草にし

押入の戸やきぬ張で人をよひ

檢校の供は旦那が片荷ずり

方丈の手から一分かはがして出

これらは翁が研究的プレゼントとして、遺しゆかれたもの、本誌愛讀者諸兄と協力して、解決せねばならぬ。尚ほ部分的に不明として居らるるものも、數に上つて居る。

内にかといへば昨日の手を合せ

『二三の解說はあれども、昨日の手の辭義に就て、未だ拍采表贊の明解に接せぬ』と。こは川柳の約束の、山谷葬式歸りの其の手として、確かに利いて居ると私は思ふ。

牡丹餅の精進落はいのこ也

『何となく破禮句らしい臭もあれど異說多し、暫く不明として置く』此句に破禮を意味しない事を私は力說し、特に翁とは再三文通もしたのであつたが、未だ享入れられなかつたのが知れた。私は自說を固守する。

寒念佛鬼で目を突く切回向

『…寒中念佛修業の是切りといふ最終の回向の晩には……』とあつて、これでみると切回向は、寒念佛の最終の夜のことのみを意味するが如くにも解せられる恐れがある。此句の上では支障はないが切回向、切り即ち終りの回向の義、唱へる回向文の終りをいふ「寺の念佛と切回向、有緣無緣乃至法界平等の聲を限り」（天網島）―有緣云々といへるは、即ち淨土宗で唱へる切回向の文で、詳しくは回向の終りに、又願、當忌寺草創以來、過去幀連名諸精靈 年忌月忌中陰諸靈、及以三界萬靈、有緣無緣、乃至法界、平等利益などと唱へるその終りの文句である（近松語彙）

とあるが正しい。此點も一ト筆頭註を添えて置きたい。

珍らしい神の名も賣る宮雀

『不明』として四行に亘り説明がしてあるが、其解で正しいと思ふ。要は『宮雀』なる語に疑問をもつて居られ、曾て『すずめ誌』三の八にも

宮雀こゝにあらはれかしこに出(文化)

の際『大駄勞解大方の致へを乞ふ』とあつた。

宮雀に雇はれ、さいはひと常から拍子のまいたる男なれば(諸國物語)

神社の境内に居て參詣者に境内附近の名所を案内しなどする者(言泉)

で、わかる。

とまれツキつめた研究は、衆智を集めて、本誌上に發表する事にしよう。私に迄說を寄せらるゝを待望する。

『講義』の特徴は參考句を併記し、頭註もて特種の語句の明瞭を期せられた事

且つごこ迄も盲斷憶測を排し、翁平素の主張を徹底されて居る態度で、その學究的眞骨頭には表敬の帽子を脱がせられる

某江戸文學研究大家が『川柳の解釋はそんなにむつかしい業ではない』と云ふやうな、口吻をもらされたとかで、翁は馬鹿らしかつたから返事もしなかつたと語られたが、其道に深く入らねば、勞苦は知られるものでない。(七月十三日稿)

光耀抄

黄蝶よお前は別な染を着て　大阪　房子
お祝ひと友が持て來るおしめかば　同　同
其れ雛よ鯉よと母のふけてゆく　同　同
主婦の友見ては居られぬ午後の四時　同　同
結ひ立てをほつと一と衿ついて居る　同　同
兒よ泣くな北風吹くな醫者へ行く　同　同
メロンさん御身は敬遠されてるよ　同　同
尖端をゆく心意氣氣は若し　岐阜　誼女
牛は牛連れその牛連れも見つからず　同　同
妬ける氣へあられガリ〳〵頬張りぬ　同　同
秋の蟲程の戀して友は逝く　同　同
たそがれを朝の乞食が歸るなり　同　縫子
居ねむりの母の姿に立ち上り　同　同
黑づくめにしても女のつや〳〵し　魚崎　吟女
煮つまつた事にも女愚痴多し　同　同
こほろぎよわたしがじつときいてる　同　壽枝女

縣人の句短評

―近作柳樽より―

安川久流美

一寸我田引水のキライはあるが「川柳雜誌」十月號の近作柳樽から 石川縣下の人々が句作したのを俎上にのせて料りて見たいと思ふ、但し、鉋丁の下手な所は怒ってくれ給ふな。先づ金澤では中堅組である柳二郎の作

嫁入った近所へ母の氣の弱し

駄句ではないが想の陳腐なこと鼻につく

又母の氣の弱い所を殊更にこの近所へ持つて來たやうな感がする

言ひ負けた母佛壇へ灯をともし

之は某氏の句であるが、内にある弱い母を説明してゐない丈け句の床しさがある、參考とされたし。

◇

同じく柳二郎

誘惑にまけて明日要る金がある

之は前句に比して佳い句だ、たゞ下調にるの重なる點は研究せねばならぬ調子だ寧ろ『金がありゝ』とした方適切でないか？誰かの

誘惑にかつて淋しい夜具の襟

の反對を採った想の句である。

◇

次は金澤の木偶人作

せめて死ぬ時だけ靜かにしておくれ

淋しい主觀の國語川柳である。

臨終を斯ういふ風に科して詠んだ所に作者は非凡な働きを有ってゐる、佳句。

◇

今雨氏の作

光に醉つたつゝましい村だ

この光は太陽の光でない？素朴な村が醉ふた光は、人間として僞瞞の光彩であらう、それに醉ふてしまつゝ鄙の人々は都會人とかけはなれたつゝましさがある、調はやゝ新し過ぎるがどこか皮肉な川柳味のあるこころに敬意を表して置く。

◇

大聖寺吉祥氏の句

弱さ隱すに怒っても見る

作者は妻に對する夫の怒りを諷したものだらうが、之を一般に弱い人間＝卽ち吠える狼の如き人間としてこれば一層妙味があるではないか。

◇

金澤旭花氏の句

出産の中へ解雇の通知が來

之は餘りに芝居がゝつて駄句である。もつゝ深く生活 究めて欲しい悲慘を通り越して滑稽を感ぜられる『出産』『解雇』この二つを組み合して作句しやうといふオーゲストラが失敗を生んだものである再考。（十月二日夜）

竹馬居雜筆を讀みて

安西杏三

私が川柳を創作するのは魂の叫びを其躍動を端的に表現したいが爲めである既に川柳に依つて表現しやうとする以上其源泉に遡つて古句を、又其歴史を研究しなければならぬのは當然の事である併し此の研究は何處迄も作家としての立場を離れてはならないと思ふ。

こゝ新しく云ふ迄もなく、古川柳は甚だしく玉石混合である。其處には短詩として永久に其光を失はないであらうものもあれば、月並な句も多く更に、狂句、破禮句も數へ切れない程あるのである。

そして此等の内には所謂難解句と稱せられるものを非常に多く含んで居て、私共が一讀何を表現して居るのであるか少しも解らないものがざらにある。

此等の句が何が故に解らないかと探求して見ると種々の原因があるであらうが其内の主なるものを擧げて見るならば、

第一には古川柳の作られた時代と現在とでは人情風俗の變化甚だしく、其爲めに當時の人々にアッピールしたものでも現代人には何の事か其意味さえも汲みとり難きもの、

第二は詠んである言葉が、其當時普通に使はれて居たものであるが時世の變遷に依つて死滅して終つて現在に於ては其言葉の意味を知るにあらざれば解釋し難いものである。

第三には詠まれた時代の人々と現代人とのリズムに對する感覺が異つて來たが爲めに其當時の人々にとつては非常にリズミカルに感ぜられたものが私共には却つてぎごちなく感ぜられて其句の價値なり意味なりを解し難くなつたものである

第四は古川柳の内には、他の文學や、謠曲、芝居等を題材として居る爲め、其れ等の知識なくしては解釋の出來ないものである。

飜つて古川柳の研究家と稱せられて居る人々の研究對象となつて居る難解句は概して今列擧した原因の内第四に屬して居るものにあるようである。

併し前にも述べた樣に私共の古川柳を研究する目的か、其處から詩的價値のあるものを發見し、作家としての教養に資せんとするにある以上は難解句の探索も原因の第一類より第三類迄で充分である第四類の句に及ぶのは謂はゞ邪道に踏み込んだものではあるまいか。

活眼を以て活社會を見ず、自己の魂の叫びを表現し得ざる作家が他の文學に表れた主人公を詠み、其一場面を句にしたとて其處に眞川柳の生るゝ能はざる事は當然過ぎる程當然である。試みに省二

先生が源氏物語を咏んだ句として本誌十月號に掲載されたものを讀んで見るならば其詩的價値のないこと、思ひ半ばに過ぎるであらふ。

實際是々の句は徒然草の何處を咏んだものである、源氏物語の中の誰が何うした事々句に纏めたものであるなどと研究し會得したとしても此は單に知識慾を滿足せしむる丈であつて、唯知りたいが爲めに知るのでは學者の仕事であつて、作家としての研究範圍以外である。

故に他の學者が古川柳の内から芝居を詠んだもの、源氏物語を川柳にしたもの等々を拾ひ集めて分類し註解を加へたとて之に對して柳人が恥なければならぬ儀務を毛頭もないのである。

私共は現在、所謂古句研究家に餘り顧みられざる古川柳の内に眞に詩的價値のあるものを指適し發表する事こそ柳人の任務であり、もし此等の仕事が他の方面の人士に依つて遂行せらる事あるとせば夫れこそ私共の恥辱であると思ふ。例へば本誌に數年に亘つて掲載せられてゐる路郎主幹の『柳樽二十四篇まで』の如きものがもつと問題にされ研究されてよい筈である。

併し川柳社會化の聲近時益々大にして其趣旨の奈邊にあるかを理解せず、其方法を誤り徒らに識者の嘲笑を招くと共に愈々一般文學のレベルより遠ざからんとする柳壇を顧みる時、大なる覺悟を以て創作に沒頭し、一句よく社會の人々をして畏敬せしむると共に他面一般文學のレベルを斷然突破せんと期して居る次第である。

どて燒の味

辰己籬楓遺稿

どて燒と云ふのを知つて、食ひ初めたのはもう五年も昔の事である。電車の四つ辻でさゝやかな屋臺店をかまへて、上かんの暖簾をひらめかしてゐるのを、よく見かけて居たのであるが、少なくとも紳士面をして背廣を着て居るものには、その暖簾をくゞる資格が無いやうに思へて、どうしても、くゞれなかつたところが幸か不幸か、青春の血が彼女に通ひかけて、樂しい又苦しい日が續いた。いよいよ苦しみの日ばかり續くやうになつて、終に或晩やけ酒をあふる事にした。それが法被と肩を並べ初めた初めである。くゞりためらふ事もなく、その上かんの屋臺店にすつくと頭をつき入れ、あの味噌の香をかぎながら、一串一串平げる時のうまさは、初戀のそれと同じく、忘れられないものとなつてしまつた、それから度々其味を味はひに脊廣の服をくゞらしたのであるが、その味にもだん〳〵遠のくやうになる頃、又戀心も薄らいで、ぬぐひ去られたやうにどこかへひそんでしまつた。最近ふとした思ひつきで屋臺店に頭をつき込んで、五串平らげたがその當時を思ひ起すにはあまりに遠い味となつてしまつてゐた。

一路集

（募集句）

柿

松丘町　一一選

裏の柿持つて一人で墓に來る　丁路

柿を佛に供へる、といふ澤山の類句中から柿の木へ想ひ出があるい〻月夜　雀の子

やゝマンネリズムだ

兄と爭ひし柿の木のある多郎

木のある、は此場合「が」ではいけないやうだ。句切れの餘情から云つてさすらひの或る日は柿が落ちてるらつぱ

或日の柿、となほしたらと思つたが…

干柿があつて倉の子おゞなしい　圓角

穿ちだが既に古いやうだ

柿の木に登る歸省の久し振り　影人

柿の木に梯子見付けた寺の朝　燈鬼

田舍寺の秋の小喜劇

三味をひく手でぶさつちよに柿がも　勝二

この場合の柿は動かない。序ながら必ずしも柿でなくても梨でも林檎でも差支ないと思へる句は採らなかつた。勿論かう一概に云ひ切るのではないが……

落ちぶれた家の柿の大木　市公

山雨樓氏に「桐の葉繁り家は逼塞」がある

澁柿と知つて〻千切る男の子　豆佛

里心柿むく手から泌みてくる　桃水

川柳創作上の「辯」を通して生れた句であるが捨てがたい

冬喰べる澁柿田舍から屆き　柳兒

勿論干柿のことではない

古里は住みよい所柿實る　武子

手のゞゞく柿をむしるに帶がたれ　スエノ

二句共に女性の句、前者の直ぐな、後者の細かな

接いだ柿成るのを見た國を出る　櫻果

見るものにして洋舘の柿は熟れ　繁坊

見るものにしては作者の主觀

澁柿は鈴なりのまゝ葉を落し　紅

原句「葉も落し」

柿が齒にしみる朝なりがの芽　吉紘堂

「みやうが」は「めうが」が正しい。芽ではな

續川柳家の戸籍調

◇　係　山雨樓

（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤務先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）嫌ひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（22）　和田天民子

（一）和田一郎（二）川柳の方は、天民子、漢詩や餘戯の文章などには天民、時に三五庵、狂雲坊とも云ふ（三）新潟縣中頸城郡水上村（四）京城本町五ノ五五（五）明治十四年五月一日生（六）銀行頭取（七）（八）これと言つて特に感服する句はありません、人の句も、自分の句も、その中に名句に行き當りたいと考へて居ます（九）讀書、圍碁、散歩只生來の趣味として漢詩和歌　俳句、外國の詩文などに感興を持つており、文學は何でも好んで居ます（一〇）子供二人　一人は東京の女子大學校一人は東京の武藏高等學校に在學、妻は家事の餘戯として西洋畫を畫きます（一一）ぶる人、川柳で云へば川柳家ぶる人、役人で云へば役人ぶる人等々（一二）學生時代からの文學好の餘勢として大正八年頃から作り始めました。

井上　麟二

く花であらう。夏の末から秋にかけて出る普通「めうがの子」といふ

濱茶屋の畫澁柿ゞ搗いてゐる　木偶人
腫物膿む朝を澁柿熟れて居る　湖山

兩句共やゝ氣になる取合せだ

逼塞へ澁柿となる葉が繁り　山雨樓
新婚旅行に柿のたわゝな　同

以上順不同に並べた二十二句量から云つて嚴選の形となつたが質からみれば寧ろ尙寛選であらう。柿の句では路郎師に「銃先の原始を見たり柿の色」がある。その他で記憶に殘るものは「柿を見にきたのではない家主の眼」位なもの。結果から見て難題であつた。

追吟

柿光る病後の頰へ秋風が　町二
妓の手から何もわからず柿を食ふ　同
熟柿落ちて紅きをヒヨコ疑へり　同

涙

涙らしい涙初めて戀を知り　寛々坊
拗ねて來た事駄菓子屋知つてゐる　村樂
處女を弔ふ涙ポツタリ　喜由
お茶漬の中へポツタリ口惜しさが　誼女
母が來て涙を拭けばもう笑ひ　丁字樓
思出は町角で母涙拭き　司郎
世渡りの道に涙も涸れて來る　らつぱ
なき姉を思ふ涙へ虫が啼き　落葉
止度なく通夜の光りの眩しくて　四五麿
兩方が涙を拭いて汽車を待ち　縫子
ひがんでる涙に妹せられてる　沒食子
紅い灯に青い灯に涙かくして　不然
心打たれし涙の日記　スエノ
二人並んで泣いて居る幼稚園　葉留夫
涙もう枯れて社會の裏に生き　翠夢
狂人の涙ぐましい程達者　山月
同情は嫁の涙を尠ながり　圓角
乾き切つた涙の跡に蒼い月　白帝子

涙ふくひょへ繼母の眼が流れ　柳月坊
涙の跡へコンパクトも物憂し　多郎
(佳)あかい灯と涙に睫毛生きる　宵勝二
涙やつとこまれば瞳うつろなり　同
拭き切れぬ涙に氣笛かまつてず　一丙
THE END　涙横顔だけを見せ　柳次
新らしい涙が浮ぶ子の忌日　菊路
ちさと涙聲で妹負けて居ず　柳兒
こしょりが殘つた事で又涙　市公
僞りの涙と知れど聞いておき　双車
鏡臺にもうあきらめた目よ乾け　日日城
母の涙父の墓石に俺には泣けな　忠二
涙の目淋しく波止場から戻り　紫石
二ケ月を支へるほどの涙金　桂枝
涙を悔ひて淪落の女ゐる　影人
寂しさは老いたる父の涙みる　芳村
涙ぐむ客を船員見逃がさず　櫻果
(佳)盛裝の涙を母はいふてやり　夕鐘

松盛琴人選

(一)井上鱗次(二)葉吉、鱗二(三)山口縣萩町(四)大連市山縣通一一六(五)明治廿六年九月一日(六)商(七)夕風ぎの三河になれて無口なる、唐四郎、文字の窯樅丘の癖も見え・鶴子、(八)櫻散る流轉にくもる眉の上(九)音樂(但し日本のものは皷以外はあまり好まず)(一〇)妻あり、五才の女兒一人(一一)蜘蛛(一二)二十四五年前ならん。

(226)

藤島茶六

(一)藤島廣司 (二)茶六、柳蛙洞(三)東京市京橋區(四)東京府下淀橋町角筈七三五番地(五)明治三十四年二月五日生(六)失業時代(目下麻雀倶樂部經營本業ではなし)(七)井上信子氏の「ごう座り直してみてもわが姿」(八)この項に書き得ぬ自分を辱かし、思ふ。折角勉強中(九)川柳以外には絶体に無しと云ひたければ金さへあれば素劇の一幕を買つて出たし(一〇)妻ゝり、子供なし(一一)物の判らぬ金持(一二)大正七八年頃なれど句會等を知つたのは大正十三年頃なり。

(227)

友淵貴山

(一)友淵赳夫(二)貴山、東郎、青泉(三)堺(四)堺市大町西三丁十三番地(五)明治三十六年二月七日(六)南海鐵道株式會社運輸課(七)「子よ妻よバラ〳〵になれば淨土なり」「バラ〳〵な骨になる日を明日に待ち」「轢けるなら轢けと鶴嘴よく

出戻りは須磨の仇波覗てかへり　里十九
子の涙隨分大きくなつて落ち　青柳
母の涙にゆるされる家出の子　同
口紅の涙よ自己を欺きし　みはる
未亡人涙の中に子を守り　明果
(佳)涙よ出るな戰ふんだ湖山
墓に降る雨を涙の樣に見る　靈霊
惜しまれる乳へ涙の日をかぞへ　占祥
(佳)處女の頃へ涙ふりむく　同
母の目が大きく見えてくる涙　山雨楼

(佳)涙にはあまりに近き讀經なり　同
涙ぢやないよと母は笑ろて見せ　白雨
君のための涙をダリヤ吸はされる　雅幽
空涙女別れるつもりなり　紅
思出は涙の跡をたどるなり　桂舟
涙たゞサンタマリアへ祈ること　雀の子
子の涙母の乳房へわすれてる　同
すぐ涙ぐむ癖母が死んでから　佐保蘭
(佳)ひかれゆく牛の涙をみつけた　同
(軸)線香へ熱い涙がぢゆと落ち　琴人

橋

◇　新水選

橋へ來て身ぶるひ一つ醉かさめ　勝二
水澄んで魚光るなり橋の上　櫻果
假橋の暗さに風の音を聞き　影人
遠雷に似て荷車の橋を行く　丁路
蜆橋建石だけが殘されて　紅
渡り初めはじめて知事の顔を知る　可醉
橋へ來てバスは大きく一つ搖れ　英賀夫
濁流に橋のなかばを一ト走り　吉祥
丸木橋知らぬながらも挨拶し　憲坊
犧牲者も出して東洋一の橋　不然
棧橋の夜をコツソリ釣つてゐる　光哉
空想の何時しか橋へ來てしまひ　柳次
橋からは社會の裏も見えそうな　きまた
橋詰へかゝる女の向ひ風　水鈴
川開き橋から追はれ〳〵出る　靈霊

朝田新水
木村晃卓　共選

泣きに來た橋に涼みがたんと居る　言絃堂
下駄だけを先に渡した丸木橋　白雨
橋を行く藝者たしかに見とゞける　巧笑
釣橋々渡つてきつい坂が見え　らつぱ
渡り初め濟んであたりは土ほこり　山月
假橋の昔のまゝもなつかしい　夕鐘
お月樣うるんで見える橋の上　みはる
石橋へかゝつてあんま立止り　縫子
橋渡る音に河鹿のはたと止み　桂枝
橋の上浴衣同志の氣が揃ひ　今雨
眞直ぐに橋から見える天主閣　沒食子
立ごまる橋へ思案を捨てゝ去り　紫石
名ばかりの橋を渡ると村が見え　葉留夫
近迫の一本橋に暇が取れ　耕民
裏山の霧れて土橋へ馬車が來る　比呂志
橋詰に聲をからして社會鍋　四五磨

そろひ」(八)質屋今女房のやうにたゝむなり(九)自分は何も出來ないものですから人のやるあらゆるスポーツ、音樂、演藝を見る聽く事が樂しみの一つです(一〇)有、男の子一人(十二)かけひなたを目のあたり見せつけられる事おべつかを平氣でやる男(十二)昭和二年の暮れ。

(12ページ)

(一)川村武猪(二)觀月(三)高知縣長岡郡吉野村屋所十九番地(四)大阪市西淀川區大和田町六二四(五)明治三十八年十月十四日(六)阪神軍鐵從業員(七)女關かゝれば目刺燒く匂ひ、素人(八)まだありません、九)あらゆる演藝、登山、讀書(一〇)結婚日淺し(一一)蛙、蛇、カズノコ、モダンガール。泥醉の女(一二)昭和二年十二月川柳雜誌吟會。

(12ページ)

(一)增位安貞(二)汀柳外に谷素定(三)只今住んでゐる家で生る(四)大阪市天王寺區上汐町一丁目五一(五)明治三十六年四月二十四日(六)收益の得る職業はありません(七)數多く頭に浮殘つてゐます、何時でも十や二十はすぐ浮び、ます、略、(八)相當にあるつもりです、(九)何んでも好きです、重なるもの卓球その他のスポーツ一切、競技となれば麻雀、撞球その他凡て、演劇、映畫も好きであれば酒も煙草も、音樂も、食べもの、(十)長男一人(一一)喋る女、喋る男、殊に男(一二)現在たまし吟社同人の杉村一刀氏より、(十三)年その川柳雜誌に投句、昭和三年山本雨迷氏と謀り、(十四)年松陽新報川柳欄に、味を致へられたに、(十五)年の川路郎師の贊助を得て柳誌たまむしを發行

叱られた妹ヂーッと橋の上　一丙
モダーンな橋蠣船は忘れられ　丁字樓
橋に來し話のつきぬ風のあり　草石
出向ひの待ちくたぶれた橋の上　裸人
假橋に先の馬力は押してやり　普天
赤い灯を考へ直す戎橋　桃太郎
橋の上兒等の叫んで蜻蛉つる　凉哉
雞宇仕替橋を渡ると笛を入れ　喜由
橋杭を標準にして水位見る　樂之雨
見上げれば橋の上にも顔があり　芳村
ふりかへり〳〵して橋の上　甲十九
滿潮の藻が橋杭にひっかゝり　湖山
帆を倒しやう〳〵舟は橋ル抜き　失明
棧橋へ希望に滿ちた顔で立ち　菊路
せがまれて抱き上げるなり虹の橋　市公
反り橋へ子供を連れた暇な晝　同
水盤の橋人形の置きごころ　木偶人
夕立の峰を見てゐる橋の上　同

佳句

險惡な一夜を守る橋になり　木偶人
橋詰に酒肴あり灯がこもり　あきら
一幅の畫になる丸木橋の位置　碧水
又一つ都を飾る橋が出來　千春
風のある橋で子の手を握りかへ　市公
夜の更けた橋の女へたちごまり　壹綏堂
在りし日を偲ぶ土橋の跡もなく　双車

◇　晃卓選

長い橋あつて縣會もめるなり　桂舟
失業の橋にもたれて水を見る　繁坊
川開き橋から追われ〳〵出る　靈壺
反橋に藝者の立つも景色なり　日日城
橋上がさわがしくなる俄雨　紫石
橋迄で別れともない星の宵　巧笑
國の母橋をたよりに用使ひ　鯉友
失業へ悲しい橋がある斗り　道樂
終電車橋へかゝつた音になり　裸人
橋が出來上り名勝一つふへ　可醉
一幅の畫になる丸木橋の位置　碧水
沒食子
ねつからに釣れそうもない橋の下　耕民
新開地橋の横手に管がふへ　鐵橋の眞下渦が卷いて居る　湖山
蓮池の橋へ繪日傘立つたまゝ　一丙
空想の何時か橋まで來てしまい　柳次
橋を渡つて思案がまた變り　夕鐘
また一つ都を飾る橋が出來　千春
丸木橋それから細い道になり　青柳
棧橋が見え懷かしい顔が見え　菊路
ラオシカエ橋を渡ると笛を入れ　喜由

杭全町

MEMO

雨綠

◆長山元水君は本社高知第二支部設置について十月六日夜幹事會を開き十一日創立句會を催され柳界のため努力されてゐます。

◆河野双車、藤岡櫻果、松山市の三好計加金澤市の越中今雨の諸氏が今回社友となられました。今後の活躍を祈ります。

◆同人松盛琴人君は九月廿四日夫人壽枝女さん同伴で大和信貴山へ參詣されました。

◆同人水谷鮎美君は天野ト居君と同伴で、九月十七日播洲淸水寺に參詣歸路なつかしい有馬へ一泊されて歸阪されました「雨の朝妻や待たむと宿を立ち」の句を寄せられました

◆社友越中今雨君(金澤)十月例會夜來阪され、路郎先生と私が會ひ、會後再會を約してゐましたが突然京都へ行かれることになつたので、折角の來阪にしみ〴〵話されなかつたのは遺感でした。

◆社友山本凡々子君は學校のラヂヒー部に關係されそのシーズンなので忙しくしてゐるとの事です。

◆社友池田雪峰君十月六日病氣で再び鄉里三重縣へ養生に行かれました。一日も早く全快を祈る。

◆一時沈滯してゐました神戸支部では支部同人明珠、臭笑太、畔曉、千年、春秋、竹

村にちと過ぎたもう流れない橋　柳兒
お月様うるんで見えた橋の上　みはる
獵犬が先きに待つてる丸木橋　桂枝
假橋は子供をつれて暇か入り　吐句坊
橋の上浴衣同士の氣が揃ひ　今雨
棧橋で繫船を見る失業者　樹光
假橋で先の馬力を押してやり　普天
心齋橋風は腰より上をふき　四五麿
橋へ來てはつきり秋の風を知り　縫子
釣橋を渡りおうせてほつとする　トシヲ
貸浴衣のんびりと立つ橋の上　葉留夫
あきらめた心中橋をふり返り　白帝子
棧橋にテープは今や切れんとす　暢山
モダーンな橋蠣舟は忘れられ　丁字樓
丸木橋渡つて連れをふり返り　青水
ぶらくーと橋上で來たは來たもの　里十九
太鼓橋子にせがまれて又渡り　みえ
朝市へ天神橋の長い事　熊谷紅
戎橋畫は見られぬ川の水　秀葉
丸木橋登山家兩手ひろげたり　忠二
下駄丈けは先に渡した丸木橋　白雨
橋へ來てバスは大きく一つゆれ　英賀夫
棧橋の月へ二人の氣は輕し　らつぱ
渡り初め母を叱つた町の人　比呂志
プロの避暑には橋もよからめ　吉祥
待つ身になつて橋から流をみる　雀の子
犧牲者も出して東洋一の橋　不然
土橋もう目高も住めぬ水となり　市公
不景氣は橋の下へも響いて來　丁路
氣強さは獨身にして戎橋　影人
板橋かろく戀の足ごり　双車
鐵橋の長さへ水の物足らず　光哉
棧橋の夜をこつそり釣つて居る　同
名橋へ添物にして寫される圓角　同
橋かけて失業對策なりと云ふ　桃水
橋越して今はつきりと旅に立ち　同
橋へ來ていつそ詫び樣かと思ひ　共鳴

大阪の橋へ夕日の落ちかゝり　水鈴
橋のほる牛の目玉の丸い事　きまた
險惡な一夜を守る橋になり　木偶人
虹の橋大家のあたりへ消えて居る　市公
煩悶を捨てに橋まで來たのなり　翠夢
欄干を擦つて渡れば痰があり　憲坊
橋に來て話のつきぬ風かあり　草石
逢ふ事の橋を怖ろしげに渡り　スエノ
勇敢に橋を渡つて來るあんま　明果
泣きに來た橋に涼みがたんと居る　吉弦堂
假橋の暗さを行けば音がする　影人
在りし日を偲ぶ土橋の跡もなく　双車
(軸)橋になる噂の中に渡着き　晃卓

風、華水、幹事の二南の諸氏が相集り、支部の更生を謀り、日覺ましき活躍振りをされ十月十九日には川柳博覽旨吟行を開催されました。

◆あうすと川柳社では觀艦式記念川柳大會を十月廿五日夜協和會館で催されます。

◆川柳こまつ吟社主催川柳作品展覽會頒布會を九月六日より三日間石川縣小松町丸和デパートで開催され全國から多數出品あつてなかなかの盛會でしたと本社支部の幹事上野錦水君から通知がありました。

◆竹田芦穗君は九十六日京阪電鐵の招待で琵琶湖を遊覽されました。

◆廣川番翁君は十月四日旅行先の岩國から「實があまりなつて柿の葉淋しそう」の句を寄せられました。

◆社友田中凡骨君は本姓喜多春秋、西村市公君は明珠と改號されました、共に路郎先生の命名です。

本號の編輯は路郎先生、ひろし、學人、町二、雨町、山雨樓、亂耽、愚陀、杏三、公二、壽技女の諸君と私とで致しました。

正誤

前號四〇頁戸籍調、伊藤傳次は博次の誤

年賀名刺廣告を募る

一口金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一口分の原稿は、なるべく簡單にお願ひ致します料金は前金のこと。

申込期限十二月十日迄(新年號掲載)

川柳雜誌社事務所

川柳書架（四二）

謠曲と川柳

安藤幻怪坊著
岡田三面子補

▼幻怪坊氏の「序に代へて」から抜く。

「本書は明治三十七年中「謠曲と川柳」の題の下に、横濱貿易新報紙上に連載したものである。（中略）昨年八月、岡田三面子博士を葉山にお訪ねして、本書の内覽をお願ひした。先生は原稿を手に執られて一覽せられた。君が二十年前の研究を今日發表するのは宜しくない、今日は古川柳研究家も多く、研究も進んで居る、自分の萬句合から抄錄して書直しては如何か。と種々の點に注意を加へていゞいた。それで私は明治四十年以來お蔵してゝしまつた古川柳の研究に再び從事することになつた。併し本編の如きは研究といふよりも、寧ろ古川柳の配列といつた方が適當であらう。併し此書に次いで眞に研究の書を發行したいと考へて居る。

本編に輯錄した川柳は、三面子先生の御秘藏の萬句合から抄出した、柳多留の句は多く先生が手抄して贈つてくださつたものである。私は三面子先生の御高恩を感謝する。

昭和二卯年四月三日　幻怪坊

▼昭和五年七月十九日發行、四六版一六四四頁、定價金七圓六拾錢、發行所東京市日本橋區通三丁目八番地春陽堂

▼本書は古川柳研究家として知られた、安藤、岡田兩氏の努力の結晶ともいふべきもので、その膨大さに於ては既刊柳書を壓倒してゐる。謠曲の研究家並に愛好者にとつても又好參考書たるを失はない

川柳手習

岸本水府著

▼この書の「序」から

「おもひきり平易にするために、例ばかりひく事につとめました。そして抽象的な文句をすこし、實際に、實際に、と書いてみました（以下略）

▼昭和五年九月十日發行、三五版一〇〇頁、定價金拾錢、發行書東京市神田區錦町一丁目誠文堂

▼著者の序文の如く、至極平易に通俗的に書いた入門書である。

北夢之助句集

北夢之助著

▼昭和五年十月三日發行、四六横綴版二七頁非賣品、發行人樺太太泊町本町西二條南六丁目北夢之助

▼著者が札幌時代、函館時代の十五年間の作品を蒐めたもの。

カナメ喫茶店

心プラにお出での節は是非お立寄を

緊縮時代に最も適合した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歡迎いたします。

南區疊屋町周防町東入南側

カナメ喫茶店

柳人

永田里十九經營

机上庭園雑草

綿谷摩耶火

【一】憑物句抄

新居に移つて約一旬日、今更愛書の念に馳られて閉ち籠つて居る。七十日程の海岸生活中身體の周邊に見出せなかつた書物の數々が、今日は嬉しくも私の身體を取巻いて居るのだ。手近の『民族と歴史』憑物研究號を引出して見た。……物の種類は非常に多いが、狐憑や犬神を筆頭に、狸・外道・餓鬼・天狗・亡靈、偖ては蛇や猫や蟇の憑物までが存在してゐた古い迷信を、滑稽にも又なつかしくも思ふ私だ。

詳諧ケイに次ぎのやうな句が有る。

(1)うたてしの犬神村に聖來て(ケイ、四)

(2)市へ出る犬神持にうしろ指(ケイ、五)

犬神は犬の怨靈で、食物和歌本草巻六に昔求めて拵へし邪悪の神なりと云ふのを見れば西歐の所謂『黒魔術』(マヂ・ノアール)に類する物なる事は明かだ。本居内遠が、犬神狐使などいふはもろこしの蟲毒の類にて云々と言へるは丁度それに當る(賤者考)。人々犬神と婚するを嫌ふ故に犬神持たけの部落を作つたらしく、もこは犬神人(ツルメソ)といふ賤民階級を疎んで卑視したのに依るらしいされば彼等が犬神を自由に驅使して人を恐れしめたのも、一つには反動的な階級水平運動であつた譯なのだ。

狐憑きの方は純然たる迷信に發すと云ふべく、飯綱と云ひ稲荷下ろしと云ひ共に單なる職業的存在で、階級的意味は淺かつたらしい。

(3)退た狐の念に渇ゑる(武玉川、三)

(4)退た狐の露の身ぶるひ(ケイ、十七)

(5)狐が落て元のうそつき(武玉川、十)

(6)狐落れば元の文盲(眉斧日錄、初)

(7)狐つき落れば元の無筆なり(柳樽)

(8)狐が落て元の吝しよく?(——)

(9)狐が落て横平な顔(武玉川、十八)

(10)狐が退て鈍な寢姿(若眼鏡、初)

(11)氣違と知らず狐の付て見る(ケイ、十七)

(12)狐が付て直る勞咳(ケイ、三)

(13)きつねが落て附藥なし(童の的、四)

最後の句は、馬鹿に憑いてゐた狐。

憑いた狐を退散せしめるには、修驗者や稲荷下しを頼んだ。最近でも、鼻の穴を燻したり裸體にして擲つたりした結果とご無慘にも殺して仕舞ふやうな迷信的悲劇が今尚ほ跡を絶たないのである。

人間の怨靈ノ憑物は、生靈と死靈の區別があるが共に殘された事例が甚だ多い(14)とりつく意地はもたぬ先妻(童の的、四)

句は嫉妬の怨靈を云ふてゐる。(妬靈の事例と句に付ては舊著「嫉妬考」で詳述した。)

(15)物の怪落て建本堂(眉斧日錄、初)

(16)物の怪は離れて元の無口なり(ケイ、十八)

蛇の憑物は卽ち蛇神であつて、黑魔術者の家系を畏怖するものなる事は犬神と同樣である。所云『蛇に魅入られた』といふ咄は、此憑物ではなくて寧ろ人獸相婚說話に屬するロオマンスの方であらう

○蛇の惚れたる娘見に行(武玉川、七)

○蛇の見入た妹のばつと沙汰(ケイ、三)

上田秋成が蛇性の婬は、此種ロオマンス中の尤なるものであつた。

【二】鬼一口

鬼一口の傳說は、伊勢物語以外に獨立した說話を構成してゐないやうだ。句は俚諺として用ひてある。

○おそろしや鬼一口の都人(一枝筌、三)

○合羽着て鬼一口の目を忍び(金砂子、下)

○あぶれたな鬼一口にやりこめる(川傍柳、三)

和漢故事要言に。餘りなる小事にて爲すに足らずと云ふ心、又、心易く爲し易き事にて、取掛りさへすれば瞬し間にも出來る抔といふ心、と解いてゐる。

【三】屏風の情趣

屏風の句は甚だ多いが、此處では、

(1)屏風も人をけし懸る物(武玉川、八)

といふ句の情趣の部面に於てのみ引用して見たいと思ふ。

(2)人間にすれば屏風の通り者(武玉川、十七)

成程、屏風ほどの『譯知りの聖』はほかに無からう。であるから、

(3)忍ぶ草屏風に耳の有ながら(眉斧日錄、七)

(4)しのぶ山屏風の恩も覺えたり(武玉川、五)

實際、狹い屏風の內に隱れる事に依つて吾人の心癖は、社會の眼から隔絕したやうな氣安さを感得する。屏風の裡こそは別世界だ。

(5)屏風の松に君の羽衣(ケイ、三)

(6)屏風の松に君が羽衣(むつの花、乾)

(7)屏風に衣人音もなし(武玉川、十二)

(8)帶かげて這入る屏風に咳一つ(同、十六)

閨房文學も此處らあたりになれば隨分ヒンが良い。

(9)三味線を屏風の外へほからかし(川傍柳、初)

(10)屏風い閨へきえる素湯漬(武玉川、十七)

(11)煙管にて寄せる屏風のもどかしさ(柳多留、三)

の三句は宛然洒落本中の場面だ。

(12)二枚屏風も二世かけた中(一枝筌、三)

(13)女房もなくて屏風もなかりけり(武玉川、四)

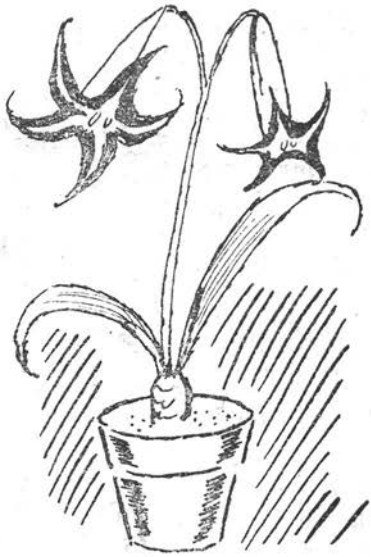
私は女房と二人、屏風さへ持たぬ簡易生活をして居る。

(以上、九月十八日、細雨の晝記)

憑物追記。本誌本年二月號、一水氏の句、

○稻荷下げ白い着物が汚れて居

成る程私の本籍地大阪では稻荷おろしと云はずに『稻荷さげ』と云つて居るやうです。榊原玄輔の榊巷談苑に云ふ、四國に犬神と云ふマジモノあり唐土にては犬蟲といふ此國のマジモノと變る事なし、また陶瓶をば蛇蟲といふ共に干寶が搜神記に見えたり云々。四國には犬神が有る代りに狐が住まず隨つて狐憑が無いと聞いた。似た話は佐渡に狐住まず狸やむじなが人に憑こと間々有る由は根岸守臣の耳囊卷二に見ゆ。是は田宮橘庵嗚呼矣卷四に錄せる源內狸、及び涼庵譚海二に錄せる二つ、國三郎と稱するむじなの事か。(九月二十一日)



各地柳壇

いのちある句を創れ（路）

本社　柳翁忌句會

九月二十二日　於　端之坊

句會に集ることの喜びは、何年たつても變るものではないが、殊にこの柳翁忌句會！一段の意義をもつことに於て、心から待たるゝものゝ一つであつた。二十二日の宵いつもかはらぬ端之坊の門をくゞられた柳人のまなざしには、人なつかしい溫情味が溢れてゐた秋のもの靜かな一夜、それは柳翁忌を迎えるにふさわしい雰圍氣であつた。この日路郎主幹は是非出席されて、一場の講演並に兼題の選をさるゝ筈であつたが、御病氣のために顏を出さるゝことが出來なかつたのは大變殘念であつた。席上ひろし氏は川柳翁に關する事歷とこれからの川柳に就て述べられ、私は當日の朝から晝過ぎまで岡山で語つた、柳壇の先覺河野鐵羅漢氏のこと並に川柳と趣味に關して清聽を煩はした。

尙川柳翁少年時代のことを今夏八月號の句年倶樂部に「砂に手習ひ」と題し出てゐたので、その文献に付き講談社へ問合せ中であることを話しておいたが、その後同社から返事があつて、あれは五代目川柳、水谷金藏の誤りであつたと斷つて來られたから お知らせ致します　山雨樓記）

（參會者）

綠雨、靖弘、洋々、無鬼、公二、雨町、かほる、金太樓、里十九、良治郎、山雨樓、靈壺、鶴峰、雅幽、鮎子、觀月、鳴玉、悟空、狂雨、千雨、卜居、宵果、愚陀、新水、おきら、艸樂、ひろし、亂耽、習々、沐天

兼題　童顏　山雨樓選

童顏のたゞ極樂を信じきり　公二
童顏は若い時分をよく話し　まさる
童顏の巡査へ鼠持つてゆき　洋々
童顏をぎようさんさうに驚かれ　無鬼
童顏の故所正しき家と聞く　鳴玉
童顏の奧の底なるヒューマニティ　愚陀
この子に生きて童顏のおもしろし　鮎美
童顏のなか〳〵話わかつてる　觀月
童顏の長屋住ひを淋しがり　狂雨
童顏と童顏サラリーを聞いてゐる　かほる
童顏の眉毛みんなにうらやまれ　悟郎
起きとればだれろ顏でパヽ寢てる　習々
童顏にたゞ〳〵朝陽ありがたし　京郎
童顏のあれでよつぽど怒つてゐ　同
巨寬の笑顏に子供もつれつき　ひろし
童顏のかゞめばイナゴ飛びかゝり　同
（人）叔母に負けるる叔父のおぼこ顏　靈壺
（地）童顏おもむろに屁をひり〳〵秋　愚陀
（天）童顏の笑つてゐるが返事らし　悟郎

席題　族　費　互選

旅費もなく伯母を頼りにやつてくる　新水
カフェーで旅費さは違ふ金拂ひ　悟空
出稼ぎの旅費を圍んで明日を待ち　沐天
旅費位苦面してやる飲んでゆけ　靈壺
血の出るやうな旅費へつてゆく　鳴玉
旅費さへも出來ず異鄕の雨にぬれ　卜居
浮いた旅費ソイシャツとなり帽子　無鬼
お守りと母胴卷へ入れてくれ　金太樓

尺八を吹いて旅費など要らぬなり　狂雨
結局は追徴される旅費であり　雨町
旅費だけがあれば從兄が居るのです　觀月
出稼ぎの旅費は嬉しい嵩となり　公二
散髪もして汽車賃減つてゆき　雅幽
やつと旅費出來て鮮人去ぬと決め　鶴峯
誘はれて斷る胸に旅費のこと　同
驛の鏡へ旅費のない顏が浮き　靖弘
妹をつれて歩くに旅費がいり　同
大阪へ着けば何とか出來る旅費　千雨
かつ〳〵の旅費へ大阪雨つゞき　同
勘定ばかりして旅費心細し　緣雨
見送りにふと旅費を考へる　同
博多から旅費を送つてくれと云ひ　かほる
有馬筆妻の旅費から買ふておき　同
出張の旅費がたらない大學出　鮎美
旅費はそのまゝ美しい雨が降り　同
旅の朝旅費はしつかり腹にあて　同
皺のない紙幣を宿屋でくづさせる　山雨樓
切りつめた旅費へ名所の多すぎる　同
細君に旅費を貰つて差なし　同

席題　面會　新水選

面會のたゞあやまつてばかりゐる　觀月
面會へ留守を使へる家でなし　習々
不景氣に面會人の多いこと　靈壺
面會に待つ間を心躍らせる　金太樓
面會をさける課長へ意地になり　狂雨
玄關にフエルトもある面會日　千雨
初めから無駄と知つてる面會人　愚陀
面會にゆけばベッドを離れてゐ　雨町
面會の歸りに近い道を去に　かほる
氣恥かしい思ひで古い友に逢ひ　公二
面會は避けたが秘書のいそがしさ　亂耽
面會日謝絶ですがごなたです　里十九
面會所お國名物並べられ　同
面會の街を電話で聞いて見る　あさら
面會謝絶工場の門雨にぬれ　同
面會にやさしい姉が來てくれる　靖弘
面會に眼鏡ふき〳〵養父來る　同
番號の襟がさびしい面會所　宵果
面會を絶つてさびしい日を送り　同
(人)面會へ奥の子供が泣き止まず　ト居
(地)面會の笑へば紅茶ゆれてゐる　鮎美
(天)面會に我が頰髭の見えるなり　觀月
(軸)面會の朝は暇なり日曜日　水

席題　變屈　緣雨選

變屈の下駄眞つすぐにちびてゐる　山雨樓
晩年はあまりにも淋しい變屈　雨町
髭を剃らぬも變屈な男にて　鮎美
子のないことを變屈淋しがり　あきら
信仰が過ぎ變屈にされてゐる　無鬼
四十に近く變屈獨り住み　沐天
變屈な顏で親子の差向ひ　鳴玉
變屈に叔父と父との意地があり　新水
變屈な丈けにきつちりしてゐます　鶴峯
色街の夜を變屈歩いて來　悟空
變屈へ卓上電話つなぐなり　亂耽
二十年無事に變屈勤めけり　雅幽
變屈屋多數決でも承知せず　洋々
變屈の父ゆえ娘嫁がれず　同
變屈と飲んだお酒は醉はぬなり　狂雨
返盃を受けて變屈それでよし　同
變屈の父に親しむ酒のあり　宵果
變屈に馴れて親しい友になり　同
(佳)日が暮れてチト變屈はうちこけ　雅幽
(同)變屈を仲居は知らぬふりをして　鮎美
(同)變屈はつきり要らぬことを云ひ　山雨樓
(同)變屈に雨の降る日に誘はれる　かほる
(同)變屈を訪へば煙管の音がする　觀月

席題　ポケット　ひろし選

ポケットに職のない身の手も寒し　狂雨
ポケットに体溫計のいる身体　新水
こゝにも〳〵とポケットが嬉しがり　ト居
ポケットへ手を突こんだ裏通り　鳴玉
ポケットへ去年のほこり觸れた指　千雨
ポケットで勘定書は丸められ　悟空
ポケットに銀貨はだかの音をさせ　鶴峯
ポケットよ魔術のやうに金が出よ　愚陀
ポケットの何處に主義はひそみ居ず　亂耽
心配無用叩いて見せるポケット　無鬼
ポケットからピラが出て來る失業者　雨町
逢ひに行く夜のポケットに櫻咲く　鮎美
ポケットの錢は輕々しく借られ　雅幽
いゝことがあるポケットの手の溫さ　山雨樓
ポケットのメンコに涙あらたなり　金太樓
ポケットの茶菓子我が子の顏が見え　同
喜びの種をポケットに忍ばして　公二
ポケットのパス一枚にあわて居る　同

席題　鏡臺　互選

空模樣變り鏡臺いそがしい　新水
鏡臺へ藝者しんから惚れて立ち　鮎美
鏡臺へ帶の結びを氣にして出　靈壺
鏡臺に妻の俥宿ならばや　沐天

鏡臺を健かな兒のかき亂し　鶴峰
鏡臺へ無口の姉はよくすわり　靖弘
鏡臺に寫る我身の愚かなり　鳴玉
鏡臺へ襖間がはすにうつるなり　かほる
鏡臺のほこりに暗い家庭なり　金太樓
鏡臺に人妻となる日が迫り　狂雨
鏡臺へ日が流れ亂耽　同
コント一篇鏡臺へ日が流れ　同
亡くなつた妻の鏡臺の冷く　ひろし
鏡臺へ賣店程に並べ立て　艸樂
鏡臺へいろ〳〵笑顔作つて見　同
鏡臺にまだ氣に入らぬ化粧なり　宵果
鏡臺に心と別な灯がともり　同
鏡臺へ夫のあくびうつるなり　觀月
鏡臺へ向へば鼻が高すぎる　同
鏡臺へ十圓紙幣を見せて出る　同

本社　十月例會

十月六日　於　端の坊

夜長月の宵は句會氣分をそゝるにふさわしいヒッチでもつて迫つて來る。圓タク洪水の堺筋から、或ひは冷めたく立つ島の内署の方から、端の坊のあの切戸をくゞる心持ちは、正に樂園に踏み入るが如き暖かい味に接する感がある。しかもこの月は、野球で云へばラッキーセブンと云つたやうに、妙に不思議なチャンスが、川柳家の上に齎らされ、毎年々々この月の句會から熱心な作家が續出してゐるのである。今年もどうやら例年と違はぬ收獲の豫感があつた。選く金澤から見えられた今雨氏、久し振りの萬よし氏、大阪媛柳川柳社の鶏牛子氏、神戸ふあうすと社の東洋鬼嶺月兩氏等參會あり、一段の光彩を副へられた（公二記）

（參會者）路郎先生、學人、英郎、靈蛮、誓々、無鬼、緣雨　公二、雨町、政夫、東洋鬼双車、清光、夢裡　今泉、荒浪、波計、裸人豆秋、町二、里十九、山雨樓、杏三、とも坊、竹水、哲郎、鮎美　卜居、觀月、白柳子、艸樂、鶴峰、今雨、鶏牛子、新水、嶺月、かほる、四五磨、亂耽、柳甫、ひろし、あきら

兼題　垢　路郎選

垢面蓬々と聖者の心知る　鶏牛子
襟垢を母に云はれて氣がつきぬ　翠夢
ぼうふらの樣な形で垢はとれ　かほる
流しはしたし笑はりやせぬか　里十九
孝行な娘の垢へ血がにじむ　觀月
奉公の垢の落ちてる大晦日　四五磨
冷水に垢のよれるも面白く　夢裡
旅商の垢も浮いてる祭の湯　卜居
ぬかんなく垢をおとしてかぜをひく　あきら
朝風呂に我垢輕く浮んでゐ　英郎
入浴の未だ許されぬ言譯し　無鬼
退院の垢は半分落される　靈蛮
垢拔けて戻る數居の高うして　双車
垢染みたものも行李に夜を歸る　新水
垢のない首を同志にうらやまれ　亂耽
自墮落を隱しきれない襟の垢　嶺月
生活の垢とも見ゆる頸飾　町二
襟垢をつけず子供は死んで行き　竹水
陽を脊に足の垢見る病上り　同
惚れられて耳の垢にも氣をくばり　裸人
垢だらけな男と女給會つてゐる　同
血と汗と垢にまみれて食へずゐる　柳甫
淋しさに手垢のついた本を讀み　同
旅の垢落しつ妻や子を想ひ　公二
おもしろい程全快の垢が起き　同
聖人の垢によごれし一生よ　鮎美
恩人に垢をば見られまいとする　同
債權が爪の垢ほどあり　山雨樓
末の子に脊こすらして恙なし　同
襟垢にいつそ錦紗のみすぼらし　東洋鬼
（五客）冷酷な男の脊中垢もなし　同
（同）おどしたりすかしたり垢をとり　豆秋
（同）開けてもはげし手垢も目立つな　今雨
（同）我が垢をフクリンさやに感じ入る　艸樂
（同）浮涙人垢が物言ふ如く逃べ　萬よし
（人）死線を越へた豊彦の垢　鮎美
（地）垢拔けがして腹の子と戻って來　白柳子
（天）ウルトラのネクタイの垢カラの垢　萬よし

席題　苦勞　互選

苦勞とは別に晩酌子をあやし　琴人
生活苦妻がほゝえむだけ淋し　鶏牛子
苦勞して蓄めたお金と齡のかず　沐天
一苦勞せよと他人へつき出され　英郎
苦勞して儲けた金だだれにやろ　波計
なぶられてゐてもさすがに苦勞人　里十九
御苦勞と言ふて貰つただけのこと　双車
御苦勞〳〵重役の眼鏡越し　卜居
病父あり弟妹もあり女給なり　無鬼
赤い灯の下で苦勞を忘れてゐ　清兒
苦勞したと極道かへつて來　とも坊
裏長屋苦勞やつれの姿なり　同
苦勞した事を技術に見せてゐる　裸人

一苦勞さす氣子供へ舞を敎せ　同　村樂
給料を貰へば苦勞又多し　同　村樂
家を出て十一月の冷を知り　同　觀月
苦勞したことを話して湯にひたり　同　觀月
苦勞せよせよと火鉢をたゝくなり　同　觀月
死顏の苦勞をさせたとも言はず　同　鮎美
鼻高く眉濃き父の苦勞性　同　鮎美
苦勞とはお前ばかりが云はれまい　同　新水
氣苦勞を掛けた位で濟ませまい　同　新水
苦勞人そんな短氣をいましめる　同　嶺月
苦勞したおもかげがある父の酒　同　嶺月
苦勞せぬ男の出しにポチ袋　同　東洋鬼
利子のつく金を使つて店は閑　同　東洋鬼
ぜ　した金とれぬ苦勞でやせるなり　同　豆秋
預つて貰ふお金で苦勞する　同　豆秋
秋の夜をうつら〳〵と苦勞性　同　豆秋
飯の食ふにも氣苦勞の母　同　靈壺
投資は叩くにばかりの勞する　同　靈壺
不景氣は妻を卑屈にしてしまい　同　靈壺
出歩くに苦勞してゐる未亡人　同　靈壺
苦勞する姉からたまの包み金　同　靈壺
叔父の眼に苦勞の足らぬ養子が來　同　靈壺
苦勞した割にとれない國訛り　同　靈壺
苦勞してしよつちう蹴を尋ねられ　同　靈壺
握らせることを忘れぬ苦勞人　同　路耶
苦勞人すぐ禮をいふ癖がつき　同　路耶
氣苦勞の話で飯を焦して居　同　路耶
顏ばかり借りられてゐる苦勞人　同　路耶

席題　期待　杏三選

アパートの庭へ期待を捨てる朝　亂耽
期待から帳落ちだつた肺を病み　亂耽
万よし期待した○對○の緊張味　鷄牛子
桃色の期待に娘生きるなり　鷄牛子
期待したほどにもなくて養子去に　鷄牛子
期待して戻れば男生れてゐ　鷄牛子
期待した程許嫁よろこばず　鷄牛子
期待今日集配人を三度見る　鷄牛子
期待せぬ債券なれど貰り躾れて　鷄牛子
期待した程に黃表紙書いてなし　鷄牛子
期待して歸れば錠がかゝつてゐ　鷄牛子
期待して來たに努力のたらなんだ　鷄牛子
裏切りを幹部が仕樣と思はざり　鷄牛子
期待して行けばお客がとれてゐる　鷄牛子
何所となく期待をさせる話ぶり　鷄牛子
期待せぬ飛び入りがあり宮相撲　鷄牛子
期待した程もない涙金　鷄牛子
期待とは別な方から嫁が來る　鷄牛子
期待されすぎて息子は翳つてゐ　鷄牛子
落膽はせぬが期待をしすぎたよ　鷄牛子
期待してゐた校長へ死の通知　鷄牛子
藝者らの期待に反し罷があり　鷄牛子
滿場の期待へ辯士風邪をひき　鷄牛子
(五客)期待した樣に丸髷叱られる　山雨樓
(同)期待を裏初られた戒橋の宵　山雨樓
(同)期待した空氣が出ない大一座　山雨樓
(同)期待する博士(ねりをる)モルモツト　山雨樓
(同)期待して行けば代役との話　山雨樓
(人)期待し、ゐる父へ椿の落ちる音　山雨樓
(地)プログラム期待にそむく鍬(ちな)　山雨樓
(天)期待してゐましたのや欠伸(あくび)す　山雨樓
(軸)期待した番號遂に五等を見　山雨樓

席題　力　嶺月選

裸人　白柳子
裸人　白柳子
裸人　白柳子

滿月は長屋を廣う見せてゐる　沐天
滿月へ背伸びしてゐる子の瞳　同
滿月へ俺の姿を振り返り　雨町
にえきらぬ戀なり月はまんまるく　東洋鬼
滿月を見てゐる樣に溺死人　同
冗談に死なうと云つた月のよさ　鮎美
滿月へ蓮を敷いて父と子と　同
滿月へ背のびをしたる夜業の灯　同
滿月にこの海峽を渡るなり　町二
（軸）滿月に隱れ家の主水を浴び　鷄牛子　選

席題　久し振り

縣人會これは〳〵の久し振り　嶺月
久し振り髭の濃ゆさも目立つなり　今雨
高らかに笑ふ心も久し振り　町二
久し振り觀音講に詣る母　新水
退院の朝に會社へ寄つてゆき　夢裡
久し振り彼女もとう〳〵死にました　あきら
久し振り俺のやせたがわかるかい　雨町
久し振りサアサア〳〵の奥座敷　哲郎
久し振り丸刈せよと叱られる　祿人
久し振りびりゝとからい唐辛子　鮎美
久し振りまだ見覺えのある着物　觀月
久し振り逢へば車を曳いてゐる　公二
久し振り恩師に會へば忘れられ　鶴峯
久し振り會へば貧亡先に言ひ　破計
久し振り女の瞳じつと見る　柳甫
筒抜けの挨拶をして久し振り　山雨樓
久し振り敷居の秋を感じたり　同
（佳）久方の父の背中に凭くゐる　沐天
（同）久し振りの話へタクシー寄つて來る　豆秋
（同）久し振り話半ばに雨になり　かほる
（同）久し振り行くと公孫樹の落葉する　柳甫
（同）あたゝかい陽ざしのなかで久し振り　鮎美
（同）久し振り若さを讓り合ふ女　公二　選

席題　稅金　琴人

稅金へ郵便局は愚痴を聞き　山雨樓
隣まだ納めぬらしく役場來る　艸樂
稅務署へ後家愚痴を言ひ〳〵　東洋鬼
あほらしさ遊興稅を拂つてゐ　嶺月
不景氣へもう稅金の紙が來る　かほる
稅金の高だけ云ふた支配人　杏三
稅金も要らぬ二階で稼ぎため　沐天
朝酒へ滯納處分書が屆き　町二
減稅の一面記事に過ぎざりき　萬よし
稅金を屆けに行けば叱るよう　四五磨
稅金がよつぽど高い上燗屋　鷄牛子
値切られて稅金のこと話すなり　觀月
狀差にさして滯納する氣なり　柳甫
稅金が少し下つて子が殖える　豆秋
督促稅心やすそに持つて來る　同
稅金を納めて晝の松竹座　鮎美
稅金へ手提金庫を旦那あけ　同
（佳）稅金へ父の苦情もついて行き　ト居
（同）滯納の心强くも連れがあり　東洋鬼
（同）査定額へ女主人の眉が寄り　町二
（同）稅金に大きな判を一つ吳れ　村樂
（同）賴みあぐんで去年通りに　里十九
（同）毛の抜けた犬へ稅金かゝるなり　公二

川柳雜誌社梅田支部句會（大阪）

題　宮　水谷鮎美報　かほる　選

さいせんをなげて大きな願ひ事　まさる
すゝをならせば耳心のほゝえみ　ト居
大國主命の家來といふお宮　同
舟が着く宮の畑の花ざかり　鮎美
ある宮の鳥居へ石をのせてみる　同
（人）さいせんをなげて二人は境内に　ト居
（地）善人の姿で宮の鈴をふり　觀月
（天）小半日かゝつて宮を見つけ出し　まさる
（軸）電車から汽車から宮がはすに見へ　かほる

題　秋　綠

友達の手紙に秋をふかく知り　雨選
牛の聲庭の桐の葉がさと落ち　まさる
秋の夜父の背中をたゝくなり　ト居
辨當を食ふ姿にも秋が來て　觀月
姑の秋の日和のきつね鮓　同
秋の陽の垣にさまつた赤とんぼ　鮎美
秋の陽の垣にさまつた赤とんぼ　同

題　塲末　新水選

毛のぬけた小犬もゐたり塲末かな　ト居
心中があつて塲末のごたかへし　鮎美
よい婿さ塲末にはやる店を出し　同
（軸）二階借塲末の夫婦氣が荒らし　新水
題　情話　かほる　選

ローマンス女はあくびしてゐる也　觀月
要談のまへに情話も出してゐる　ト居
入墨のことからさいた色ざんけ　同
情話からまる松へきてみる　同
春の宵情話のなかの四疊半　鮎美
情話本で憎らしい蚊を殺ろし　同
君だけと云ふて聞かせた情話　まさる
情話を聞かせたあとで泣いてゐる　同
（人）情話本ふたりは惚によりかゝり　鮎美

(地)線香の煙情話の墓にたち　同
(天)情話本炬燵のうへに溫いなり　同　かほる
(軸)その情話男返事をしてくれず　かほる

川柳雜誌社
神戸支部　**川柳秋の陣**

九月十三日　於四宮神社

日野華水報

虫すだくを聞き作句、主幹麻生路郎氏の出席を得て盛會、電燈の故障蠟燭のゆらめき、何か、そこに聯想するものがある。路郎主幹の講演、ヒューズは餘りに現實な」は意味深く參會者をして謹聽せしめた。

出席者＝路郎先生、雨町、明烏、かほる、東洋鬼、不然、梅雅、南耕、桃水、睡花、一湖、一狂、素生、嶺月、立名、完二、紋太、亂耽、千年、市公、凡骨、二南、華水、

題　足　互選

足跡に足をあはせて見る　刑事　桃水
急がしい足へ兒犬のじやれて來る　南耕
映寫中誰かの足にけつまづき　嶺月
足袋脫げばあはれに白き足の先　東洋鬼
足並の遠ふわが子に呼びかける　市公
不甲斐なき夫と見えし足の傷　雨町
足は秋の絨壇に戀　亂耽
アメリカの雜誌に足がならんでゐる　かほる
踏ん張つた足の細さを笑ふ土　完二
こほろぎは女の足に隙を見せ　一狂
小出樹重に此足畵かさばや　同

題　男　互選

くつろいで室一パイの大男　一湖
男なら來いと云はれて行つて負け　凡骨
眞操論男としての立場から　雨町
サラリーに男頭を押へられ　亂耽
雜音の中で男は押されたり　かほる
女房のする借金のほろ苦く　路郎
腹立ちに男らしさが目立つなり　睡花
掌へとける涙は男にて　東洋鬼
蒼空に見入る男に職が無し　一狂
大男褌だけで夏が暮れ　不然
男親遊ぶ相談ばかりする　市公
本當の涙を男喰ひしばり　桃水
電燈の事に男の手が借られ　不然
へつついへしやがむ男に職がなし　紋太
無造作に男の世界を覗く猫　完二
大男月のない夜へ醉ふて去に　睡花
男の子泣いてならない顏でくる　桃水
座談會男にいたい事も云ひ　雨町
交際所男が一人うなだれる　紋太
石鹼のあわから男顏を出し　市公
叩かれてゐる男には親があり　かほる

席題　虫　二南選

泣きやんだ虫へすまない足をとめ　梅雅
虫の音を夢に織り込む子の寢顏　桃水
辛抱をする氣になつて虫を聞き　睡花
虫の聲フエルトの音も知つてゐる　市公
二階借宵から同じ虫を聞き　紋太
(佳)盛傷を虫にとられた蘇鐵の樹　亂耽

席題　夜店　かほる選

夜店から橋迄に出る瓣がつき　一湖
夜店ふと見れば友達値切つてる　半疊
睦じう夜店同志は膝を見せ　桃水
新妻が夜店へ引張り出されてる　市公
こんなものどこにもないと夜店寶　華水
客の足ばかり眺めて夜店閑　嶺月
夜店まだ灯を入れないで一つ賣れ　素生
い、月に夜店の品に影が出來　一狂
なんぼなら買ふと夜店の賣るつもり　凡骨
ぞろ〳〵と夜店を通る足になり　雨町
夜店から何にも買はず戻つて來　同
藥局の剩錢は夜店の客でなし　睡花
夜店まだ揃はず本屋客があり　同
夜店また頭の上で値を聞かれ　東洋鬼
賣れぬ日の夜店隣りへ話しかけ　同
夜で會ふて麻雀に誘れる　亂耽

夜店時代のいとはんの戀　同

席題　內祝　紋太選

內祝女中の親を歸らさず　睡花
全快の派手にやりたい內祝　雨町
內祝猫は優しう座を追はれ　東洋鬼
內祝そうかと主人一寸見る　凡骨
內祝偽りのない盆の艶　華水
(人)社の者はちつとも知らぬ內祝　嶺月
(地)內祝煙草を喫ふて叱られる　かほる
(天)內祝その母その子見直され　一狂

兼題　財產　路郎選

無一物土のぬくさに眼を閉ぢる　完二
財產を守る火鉢に座つて居　素生
資產家のいつ通つても水を撒き　睡花
財產の高が養子にわかつて來　嶺月
財產があつて胃散がはなされず　華水
財產の噂に困る菊地寬　一狂
財產のある乞食とは露知らず　紋太
蓄財にたけて少うし卑屈なり　不然

財産にりも吝いのでよく知られ　同
有り餘る金にチト氣が狂ひ出し　京　耶
財産へ娘をやつたやうに云ひ　同
金持つて疑ひ深く後家で居る　東洋鬼
財産が有つて机の上の主義　同
(人)五萬圓三萬圓と分けてやり　かほる
(地)財産が出來て隣の灯が恐はく　同
(天)末席へ座らうとする財産家　素生
(軸)財産家リレーの金の中に生き　路耶

川柳雑誌社 **守口支部九月例會**(大阪)

九月二十四日　於平野翠香園

朝田新水報

兼題　雑　詠　互　選

只書いてやる樣に云ふ經木書　双葉子
籐椅子の夢に君をば追ふてゐた　蒼太
男の子十錢やると竹を買ひ　かほる
乘物のありだけ乘つて信心さ　日日城
爽やかにゲートル卷いて宿を立ち　卯三
御祝儀のするめを猫にうばれる　當り矢
空腹へやたらに酒が香ふて來　清光
氷割る音に蟋蟀鳴きやまず　新水
男三十戀も知らずに模範工　双車
儲かつた事にも妻は泣いてゐる　スェノ
差し向ひ外は賑合ふ地藏盆　翠峯
手仕事の側に子供の圓い顔　同
變屈は好きな子が居る空地へ來　公二
それ〴〵のいびきの中に母の咳　同
殺してやるとは恐ろしヒステリー　あきら
皆樣ナカ〳〵むつかし支那手品　同

席題　表　札　かほる　選

表札がづらりと並ぶ路次口　當り矢
表札と一緒に古びて行く世帶　燦耶
表札の寓の主の三下り　あきら
表札にふと家柄のうなづかれ　双葉子
表札の一字わかぬまゝに立ち　新水
只寓と書いて女中を置いてゐる　公二
表札の變るたんびに立つ噂　同
(人)表札を見て押賣が戸を開ける　双葉子
(地)女文字一日閉めたまゝに暮れ　蒼太
(天)愛の巣へまだ表札を掛けずゐる　新水
(軸)表札の勝手口のも同じ色　かほる

席題　案山子　互　選

來年は案山子に讓る繼をあて　源坊
此の案山子父の姿によく似たる　燦耶
俄か雨案山子から傘ひつたくり　當り矢
雀もう案山子位とおどろかず　あきら
案山子淋しく風にうなづき　蒼太
案山子の手向つて右を上げてゐる　かほる
無造作に出來た案山子でないらしい　同
駈落の路を案山子は知つてゐる　双葉子
石投げる兒等の案山子は的にされ　同
稻こけて案山子の笠も飛んでゐる　公二
刈入れへ案山子の無駄な頰かむり　同
豐年の案山子へ晴れた日がつゞき　同
案山子へも急轉直下寒うなり　新水
節約を案山子に見せるアッパッパ　同
人間の慾が案山子にまで見られ　同

川柳雑誌社 **鶴町支部句會**

十月四日夜　於雅幽居　關本雅幽報

題年　寄　互　選

老人の口尠ないをよろこばれ　三平
大師講電車の中で嫁の愚痴　のぶを
やれ〳〵と思へば孫の守りをせよ　雅幽
彼の世から取り殘された樣に生き　同
入口をあぶながつてる歳になり　綠雨
昨日の事をまた年寄りが言ひ出し　同

川柳雑誌社 **籔川支部 十月例會**(島根)

十月四日夜　於紫光居　伊藤綠之助報

兼題　習　慣　綠之助　選

習慣づけられたる檻の獅子　紫光
習慣になれて素直な首祭　奈翁詠
(人)習慣にいつしか主義が芽生ゑて　麗函
(地)習慣へ誰もかれもがあらたまり　雷相
(天)押し切つて行く習慣に生活苦　麗函

席題　口　笛　奈翁詠　選

出まかせの口笛一杯氣嫌なり　久磨緒
口笛の小唄だん〳〵遠くなり　麗函
公休日だで口笛も面白く　雷相
荷作りに慣れて口笛ふくもよし　綠之助
秋の夜の口笛ここも草津節　紫光
近寄つて來る口笛に戀があり　同
(人)口笛はしてやつたりの形なり　雷相
(地)口笛の巧い子下手な子夕燒け　綠之助
(天)自轉車の口笛帶がさけかゝり　麗函

席題　遠　慮　雷相　選

押しのける力あたりへ遠慮せず　綠之助
遠慮してゐる鼻先の煽風器　麗函
遠慮でばなく繼母へ無口なり　奈翁詠
紋附へ母から遠慮敎へられ　久磨緒

席題　若槻全權を迎ふ　互　選

萬歳の旗差上げて一年生　紫光
息づまる程の雄姿に對したる　久磨緒
朝露に濡れてアーチは時を待ち　麗亟
政黨と別に閣下は迎えられ　奈翁詠
親しさは閣下にまじる出雲辯　霜相
偶像に非ず偉人さまみゆる日　緣之助
兒童の胸にしかと若槻禮次郎　同

川柳雜誌社神戸支部　**月を賞ずる句會**

十月四日　於　楠町事務所　日野華水報

小雨降つた後をうけて月は正に中天に、佳い月だなあゝ思はず讃嘆窓から眺め乍ら句作に耽る。

出席者　紋太、卯生、桃水、睡花、嶺月、梅雅、草人、耕甫、清公子、重陽子、於兎二ひでを、山都、一狂、二南、明珠、春秋、千年、鬼笑太、華水

席題　聯　珠　　互　選

聯珠屋にマッチを借りて考へる　山都
職珠屋がだまつてゐると寒うなり　ひでを
辻五目家に歸らぬ辨當箱　清公子
どや〳〵と來た碁に聯珠追ひ出され　春秋
三三の手ばかり出來て笑はれる　明珠
もう一度聯珠に腹を立てゝ去に　二南
正解をたしかめ乍ら五目まけ　耕甫
ガスの灯がゆれて聯珠に客がなし　睡花

席題　新　築　　互　選

一　點　句

錆びた喉園から洩れてくる　桃水
新築の通りを羅宇屋拔けて見る　ひでを
まだ屋根のない新築へ結ぶ霜　梅雅
米松のにほひ嬉しく建ち上り　重陽子
新築の家貸われらに緣がなし　嶺月
新築の西日をさける日覆なり　山都
新築の家にオムツが乾されて居　千年

二　點　句

新築の木屑から出る仔猫　卯生
新築のよごれてゆくは貸家札　嶺月
新築の通り利久の音もよし　ひでを
新築の椽で細君滑りかけ　二南
内普請になつて鉋屑艶があり　桃水
新築は陽を赫々と浴びるとこ　一狂
新築に恩給殘るばかりなり　同
新築の障子あけると海が見え　春秋
新築の床にほんものかゝつて居　同
新築にまだ落ちつかぬ庭の石　華水
新築の客へ二階の暮を開け　同

三　點　句

新築へ火災保險を進めに來　明珠
新築へ符籠のはつた荷が届き　同
新築の出來て風呂屋に廻り道　耕甫
新築の二階がつゞく雨の街　睡花
籐椅子のある新築に伸び上り　二南
新築に長男別なベルをつけ　草人

五　點　句

新築はベルを押してもよくひゞき　春秋
新築へ二度目に來たは連れがあり　ひでを
新築へ胸の病のまゝでくる　睡花
新築は硝子障子の音で明け　明珠

六　點　句

噴水で新築の畫手を洗ひ　卯生
和食部できせるの音を女客　ひでを
和食部へ母の好みで席を取り　梅雅
ぶゞ漬に遊びつかれた二日醉　山都
桃割れに和食氣安う振舞はれ　二南
一人だけ母が交つて皆和食　桃水
女房について這入れば和食堂　草人
和食部の銚子の數が殖えてゆき　嶺月
其の頃の話がはずむ幕の内　重陽子
(人)箸を割る母へ結構ものづくり　桃水
(地)砂勝旗和食に並ぶ障に立て　一狂
(天)銘仙の柄を見直す幕の内　ひでを

席題　港　　草　人　選

物凄い女に港除がせる　春秋
笛一つ港の夜は淋し過ぎ　明珠
檣へ港の秋は暮れて行き　葉水
起重機も眠る港の夜のしじま　重陽子
キヤビンからだゝ懷しむ港の灯　桃水
エンヂンは港へ着いた音になり　同
口笛に港の街の灯がゆらぐ　山都
アプサンに港の夜が長いなり　同
港々思ふ女があるぢやなし　嶺月
港には港の女そして酒　梅雅
救はれたとこから見える港の灯　睡花
船に遲れて女の智慧を嗤ふ朝　一狂
(人)鰯雲港の人らよく動き　二南
(地)爪先あかりに港の夜は更け　卯生
(天)昏が港の朝に爛れてゐ　一狂

席題　國勢調査　　一　狂　選

調査員うつかり同じ家に來る　於兎二
國調は受驗心地で書き並べ　春秋

睡花選

調査する入へ臨本見てもらひ　明珠
ありのまゝ書いて貰ふてゐる女將　山都
ありのまゝちと恥しい生活だ　清公子
ありのまゝ書けない職で飯を食ひ　梅雅
國調に潤一郎は、どうする氣　二南
國勢調査迫夜はあまりにもかなし　睡花
國調へウカと子の名を書き違へ　草人
鮮人を納得させる調査員　嶺月
失業と書いて暫く眼をつむり　重陽子
(人)國調は皆カ字にして渡すなり　春秋
(地)申告書長男まぜたことを云ふ　二南
(天)國調へ二階の人は年が知れ　華水
(軸)國籍にアメリカと書く目がすゞ　一狂

兼題　月　夜　二　南　選

公園の月を斜に避けて戀　華水
奉公にゆく子を送る月明り　睡花
譜を出して寮に居殘るいゝ月夜　一狂
神戸が吾脚元に在る月夜　清公子
いゝ月夜父は茶漬を喰つてゐる　重陽子
嬉しさは月夜に影がならぶなり　山部
(佳)自炊から一升瓶の出る月夜　於兎二
(佳)ゆつくりと歩るきな月を見な　鬼笑太
(佳)いゝ月だが病院の窓硝子　清公子
(佳)觀月會遠慮の多い人とゐる　明珠
(佳)しあはせと思ふ月夜に飲んせる　同

川柳雑誌社　**小松支部拾月例會**（石川）

十月五日　上野錦水報

席題　拔　毛　兎　月　選

拔毛する事も話して妻同志　加賀守
毛の拔けた猫に一匹盗られたり　同
フケ落し拔毛の中にある白髮　松水
拔毛して座る鏡へ秋の冷え　同
狗の毛にして姉藝妓椽へ立ち　北山人
(秀)おぢさんと呼ばれ秋を拔ける髮　同

席題　鯛　加賀守選

鯛網の待てば待つ程遠くゐる　兎月
鯛だけは別に包んだ送り膳　北山人
大鯛へ妻庖丁を惜しく當て　同
その當り明るくさせて鯛の色　松水
番臺を派手に見せてる連子鯛　北山人
(秀)鯛一尾不足のできた事が耳　兎月
(同)鯛の尾は焦してならぬもしし樣　同
(同)簡略にした燒物は金菓糖　北山人

席題　洩　れ　松水選

ほのかにも洩れる障子の月白し　兎月
さゝやきの其處から鈍い灯が洩れる　北山人
(秀)入塲はもうできぬ聲が洩れ　同
(秀)夏の戸を餘りに洩れる秋の風　加賀守

席題　呑　氣　北山人選

呑氣とは異ふ釣の糸が切れ　兎月
飴賣の夕燒雲へ子をよせて　松水
歩む子とゐて日盛りを無駄にする　同
交換臺又かと思ふ夜の電話　兎月
(秀)鮮人の髯の型まで呑氣さう　松水
(同)失業者或は呑氣さうに見え　同
(同)野球見て歸れば妻の只あきれ　加賀守
(同)番頭と並ぶ帳塲の息子ひま　兎月

川柳雑誌社　**御旅支部例會**（大阪）

十月六日名月を前にして
於天神森石川縣　圓角報

兼題　名　月　路　耶　翠夢選

名月が歪んで見えたバルコニー　翠夢
明るさへまた出て月の影をふむ　習々
月々同じ月でも詩にされる　多耶
名月もうつるレールの淋しそう　みつる
あの月の無情さ二人知つてゐる　同
名月へラヂオは邪魔なものにされ　靈壺
名月へもう何年か前の戀　同
(人)若き頃芒の影に二人ゐし　路烏
(地)名月に煙の都けろりとし　圓角
(天)名月や大和平野は夢の國　翠夢
(軸)滿月へさつと一ト棹入れてゆく　路耶
(同)投げつけたやうに出た橋の月　同

兼題　怒　り　路　耶　選

怒り合つてみる戀の戯れ　みつる
怒らして妓の姿だけ目に殘り　多耶
怒つてる顏に親子の血が流れ　同
怒りもせずに苦り切つてる　靈壺
怒られるために來たのでないのだ　同
(人)怒つてる幹事を藝妓座らせる　同
(同)全的に怒つて世の中渡つてゐ　圓角
(同)あの人の怒つたお顏思ひ出し　飛佐志
(地)エロありて怒りも何も征服し　路烏
(同)やつあたり小鳥にまで怒つてゐ　翠夢
(天)政治家だ大臣だ何が彼等が　圓角

兼題　別　莊　路　耶　選

父死ぬと共に別莊賣られけり　圓角
抵當に入れた別莊の寫眞撮る　飛佐志
別莊の掃除がいやと云ふ彼女　路烏
監獄のやうに別莊そびえたち　翠夢
死なゞ考へずに建てる別莊　みつる

別莊守旦那のまれも出來る秋　多郎
別莊は黴の匂ひのすると所　同
別莊が本宅になる停年期　靈壺
別莊にもう明日〳〵と云ふ命　同
中年の戀するによし別莊地　同

席題　不　惑　路　郎　選

圓滿に其誘惑を切りくづし　多郎
徒らに女房につらくあたる我　路烏
もう四十だからと妻はに心配し　圓角
就職へ不惑の頭下げてゐる　翠夢
考へがあつて不惑を遊んでる　同
（軸）四十にして惑はずと云ふ二階借　路郎
（同）酒女酒で不惑に手がとゞき　同

席題　人　並　路　郎　選

鏡へは人並ならぬ自信持ち　圓角
人並の虚榮もありて嘘も云ふ　翠夢
世の人の人並にしゝ居るんです　みつる
（軸）人並にいけるといふが酒のこと　路郎

川柳雜誌社　天王寺支部例會（大阪）

十月十日　於柳精居　須崎豆秋報

席題　破　裂　互　選

風船の破裂に子供驚かせ　綠雨
音よりも大きく花火開いたり　琴人
フラスコが何度も破裂して博士　柳精
破裂した音が警察まで聞え　裸人
秋日和コロリと栗が破裂する　豆秋
代表が卓を叩いて歸るなり　公二
導火線あんな大きな岩が破れ　黄蛾
破裂する物とも見へず瓦斯タンク　同

席題　物好き　黄　蛾　選

物好きにチンバの犬を貰つて來　豆秋
物好きに戀の邪魔してうらまれる　柳精
物好きの何にも釣らず戻つて來　裸人
物好きはシヤボテンばかり植ゑて　公二
物好きへ今金槌が見當らず　雨町
（軸）物好きと云はれながらも小一年　黄蛾

席題　香具師　公　二　選

手品からぼた〳〵やしは人をよせ　裸人
三菱ゞ家來のやうに香具師が云ひ　豆秋
前へ出た子供は香具師に使はれる　雨町
ステツキをついて廻つて香具師喋り　綠雨
確實と思はせるまで香具師舌り　琴人
佳　錢がないのかと香具師に出し　同
（佳）二三度も丸を縮め香具師の杖　黄蛾
（佳）人寄が先生と呼ぶ香具師の髭　同

席題　青　年　雨　町　選

卓を叩いて青年の意氣　黄蛾
青年がラッパをふいて通る月　豆秋
金儲けにまだ青年はありつけず　綠雨
口笛を吹いて青年誘いに來　裸人
青年の意氣に村長たよつてゐ　同
（佳）お隣のボヤへ青年園が來る　同
（佳）青年の夢に南洋の雨が降る　豆秋
（佳）辭書を枕に青年は寢てしまひ　綠雨

兼題　紅　葉　綠　雨　選

雪の朝一入紅葉さえてゐる　公二
寒霞涙の紅葉に猿を見付けたり　櫻果
紅葉する秋書齋にばりゐる　雨町
急がしい汽車の窓から見る紅葉　三汀
紅葉より芝居がよいと娘云ひ　琴人
逢ふた人もう一度逢ふ紅葉山　豆秋
立札のとこへ紅葉を折つて出る　黄蛾
（佳）紅葉狩もう飲む事を云ふてゐる　裸人
（佳）袷着た母のたすきへ散る紅葉　同
（佳）紅葉した山で一發鳴つたきり　琴人

兼題　烏　選

夜烏に故郷の月は照つてゐる　海洋人
氣がゝりな朝を烏の鳴き交し　豆秋
肥柄杓烏一尺一尺逃げ　櫻果
洗濯をしてゐる上で烏啼き　雨町
宿から見える烏に行商は疲れ　綠雨
おつとりとしてる烏へ陽が影り　黄蛾
（佳）烏なき父コンスイがまだ續き　裸人
（佳）烏鳴き茶毘の煙が細う立ち　豆秋
（佳）夜烏を聞き聞き明日を考へる　三汀
（軸）夕烏仕事あぶれたやうに飛び　琴人

南海至誠川柳九月例會（大阪）

九月十六日　於天下茶屋集會所

桃　割　互　選

桃割の娘は母と背くらべ　山彦
桃割でゐても女給は女給だけ　萬兩
桃割の或は暗い顔もして　一杉
桃割に日傘の色のよく似合ひ　瓢山
桃割で來たタイピスト冷かされ　夏曉
桃割の一本氣らしい歩きぶり　竹石
變裝の桃割結ふて見たくなり　骨皮
桃割を結はし父親恙なし　烏莊
派手にするその桃割の淋しふて　さだを
桃割の次で降りるを知つて居り　同
桃割にチト疵癪な鼻の位置　青砂郎

桃割へ袷をたのむつもりで居　同
丸髷も桃割も出た店開き　黒天子
落付かぬ氣は桃割の鬢を撫で　同
泣くこともあつて桃割美しい　多聞
折れそうな首へ桃割結ひ上げる　同

幹事　多聞選

何事も幹事まかせと言ふてみる　樹光
何事ぞ幹事の意氣の荒いこと　竹石
やう〳〵の事で幹事は乘せるなり
お便所の所在を幹事たしかめる　同
幹事もう職責丈けの言葉なり　黒天子
唄ふ丈け唄ひ喰ふだけ喰ふ幹事　青砂郎
幹事の耳打ち烏田うなづくばかり　烏莊
あの方の幹事に慣れてゐる男　夏曉
改札を幹事らしいが先に出る　樹光
あるときは怒つた顔もする幹事　一杉
頼まれぬ幹事の役を買つて出る　さだを
(佳)風呂敷を提げてくるの幹事なり　青砂郎
(同)お膳からお膳へ飛んで幹事なり　貴山
(同)寂しさは幹事なりける酒の味　青砂郎
(同)仁丹を買ひに幹事は走らされ　貴山
(軸)總踊り酔ふた幹事が先にたち　多聞

東西屋　互選

東西屋今日も夫婦で家を出る　樹光
東西屋電信棒をたてにとり　黒天子
東西屋無口なやうな顔で行く　一杉
東西屋いつもの犬にまわり道　多聞
東西屋あとで子供がまれてゐる　山彦
東西屋安來節から切口上　竹石
賣出しに踊つてばかり東西屋　天郎
赤足袋のコハせとれてる東西屋　貴山
東西屋御飯のなかにきこえて來　同
東西屋生れながらの面に出來　夏曉
チグハグな服裝で來る東西屋　同
東西屋買はれば損のやうに言ひ　同
トラックを危く避けて東西屋　さだを
東西屋日かげの方でやるつもり　同
賞める丈けほめてしまつた東西屋　青砂郎
東西屋それで女房があのかへ　同

岡惚れ　朝陽選

岡惚れで獨身時を思はれる　山彦
下駄の音聞て見合す岡惚れ　涼哉
眞實をいはず岡惚れ顔でゐる　一杉
岡惚れの今日も時間を待つてゐる　樹光
岡惚れは挨拶だけがやつと出來　烏莊
岡惚れは始終の事の獨身者　飄山
岡惚れの男尻目に通るなり　さだを
岡惚の話チヤブ臺圍んでゐ　黒天子
岡惚れの彼女文學好きと言ふ　青砂郎
岡惚れの女は先に出てしまひ　天全
岡惚れと知りつゝ毎夜通ふなり　海耳
岡惚れをハツキリ知つた帶の柄　貴山
岡惚れのみまいとすれど顔かたち　竹石
岡惚れの歸る時間に驛へ來る　夏曉
岡惚れがウヨ〳〵とロケーションン　同
岡惚れへ靴のかゞとは高いなり　多聞
美しいのへ改札の切り損れ　同
岡惚れは帽子の緣をなほして見　曙水
岡惚れの襟をきつちり合して　同
岡惚れのかへる小道で待つて居り　同
(佳)岡惚れに葉書を貰ふ嬉しい日　夏曉
(同)岡惚れに今日は男の連があり　烏莊
(同)岡惚れの男へ藝者すれてみる　さだを
(同)岡惚の女の側へそつと行き　黄土
(同)岡惚れの今日は繪日傘提げてゐる　一杉
(同)岡惚れの氣づいたらしい素振り　同
(同)岡惚れへ角帽丈けは認められ　青砂郎
(同)岡惚れへ二三歩足を踏み出し　同
(人)岡惚れは靴の汚れを一寸拭き　青砂郎
(同)タイピスト岡惚れされた氣持なり　竹石
(同)岡惚れを島田の袖に包んで來　黒天子
(地)岡惚れも好い加減におし厭な人　骨皮
(同)岡惚れは桃割に見せ袖に見せ　黒天子
(天)岡惚の車掌へ無駄な汽車に乘り　夏曉
(軸)岡惚れを灯影へまれく盆踊り　朝陽

ピストル　互選

ピストルの出所は知れてつかまらず　樹光
ピストルへ父降參の手を上げる　さだを
ピストルの一遍丈けはねらつて見　烏莊
ピストルの手觸りもよし白い蚊帳　一杉
十三の橋でピストル蹤蹤づき　多聞
ピストルの覆面とれば美い男　同
ピストルのある抽斗はかぎがあり　青砂郎

飴玉　夏曉選

拗れきつた顔飴玉ですまぬなり　黒天子
飴玉がみんな溶けてる鑵の中　樹光
新世帶飴玉しやぶり水仕事　天郎
飴玉もれぶり煙草も吸ふてゐる　青砂郎
飴玉を頬張るゞ父は呼んでゐる　朝陽
飴玉の面倒臭く嚙み碎き　青砂郎
熊野みやげ　同
那智黒の甘さ奥齒に泌み込んで　一杉
一錢を飴玉にして得心し　竹石

飴玉を嚙んで社長の前へ來る　貴山
(人)飴玉を口から口へ母はとり　天郎
(地)縄上の紐に飴玉落ちかゝり　多聞
(天)飴玉の色で分け前決まるなり　一杉
(軸)飴玉を器用にかくす舌の先　夏曉

角力吟　(勝句)

俄雨相々傘で駈けて來る　天全
極道なる子息子へ禿げて行き　黒天子
泣面の競馬歸りの雨に逢ひ　朝陽
醉ふた目に儼然と立つ信號機　貴山
現給に甘んじてゐる不景氣さ　さだを
婦人科へもう馴れ切つた足で來る　青砂郎
十月の賞與遊んだあさになり　黒天子
投賣の土間で懷ろ勘定する　一杉
諦めて母の淋しい立姿　青砂郎
大豆粕積んで大連からの船　夏曉
女房の意見茶漬けで聞き流し　萬兩
馬の汗拭ふいとまも無い姿　さだを
媾曳へ淋しそうなりきりぎりす　曙水
口論のあとへ味ない酒をのみ　樹光

判斷　路郎選

判斷をしかれ疊の毛をむしり　骨皮
まああれが女なのかと里の母　飛水
お察しがよいとは娘まさた口　夏曉
夢判斷所何とか理屈つけられる　格子郎
判斷もせぬまに下宿追出され　寛
運命を占ふ方が賃相な　樹光
判斷に女房の智慧をかろんずる　多聞
逆夢かと氣にかけさせぬ母の説　泰平
判斷もせずに娘は死を急ぎ　紫水
解雇辭令判斷つかぬ先につき　將吉郎

判斷のつかぬ文字を賞めてゐる　烏莊
判斷は母にまかして良い娘　黒天子
判斷はこれからといふ四疊半　朝浦
おごられてさて判斷がつかぬなり　一杉
そこは君の判斷にまかす輕く逃げ　彌六
この上の生命判斷十五圓　天全
判斷はブッキラ棒に言つてのけ　竹石
身の上の判斷に淋しさを感じ　黄土
判斷の仕樣もないと嫁は拗れ　泰平
判斷のついた頃には死んでゐる　瓢山
(五客)氣にかゝる夢直に解き遊ぶ　泰平
(同)判斷がつかず忘れることにする　同
(同)モガの氣はその判斷の先を行き　紫水
(同)判斷を抱かへて出れば蹴置き　多聞
(同)判斷へあかぎれの手は冷圓し　青砂郎
(人)判斷に委す爪をしがむのみ　青砂郎
(地)落付いて聞けばよかつた子のなげき　一杉
(天)良い方に判斷をして髭を剃り　黒天子

腰　路郎選

背の兒は腰のあたりで支へられ　瓢山
秋風が吹いて床几が邪魔になり　一仙
殊更に腰をかがめて意見をし　紫水
翁腰と見せまいとして煙草つけ　烏莊
腰弱くゆけば事なくすんだのに　同
腰を折れ何も思ふな金儲け　一杉
中腰になつて子供に手を引かれ　白夕
腰据へて欲しいが母の願なり　海耳
腰のもの竹光ですむエキストラ　飛水
容れられず腰かけといふ判を押し　泉來
腰かけて語るに忙し秋の日よ　さだを
愛嬌もの腰を外して笑はせる　骨皮
將吉郎　格子郎
腰かけを讓るに人を選んでる　夏曉
丸腰の今日は淋しい世帶也　同
浮腰に成つた處へ本蟲打　格子郎
(人)腰縄の名士に看手小さう見え　紫水
(地)ノラ息子親父と斜に腰をかけ　貴山
(天)食ふための冷たい椅子へ腰をのせ　將吉郎

至誠川柳會

八月十二日　濱寺海水浴場　竹内多聞報
(前の號の續き)

席題　濱寺　互選

濱寺でボ！トへビール持つて乘り　翠山
夏丈けの設備かと思ふ濱寺　樹光
濱寺でかすかに摩耶の灯を見つめ　ト居
東洋一さきく濱寺の甘酒屋　喜彦
濱寺は松の闇からデヤズの音　多聞
濱寺の夜の扇子が邪魔になり　さだを
洋食の煙濱寺をくすべたり　貴山
濱寺で下り特急のりかへる　朝陽
濱寺の夜に大阪忘れられ　水路
濱寺へ着けば生憎雨になり　格子樓
三十年型の濱寺の色　黒天子
濱寺へ濱寺へと下りる人　壽枝女
濱寺の夏煙突が急に出來　青砂郎
濱寺の夏なればこそヂヤズバンド　彩峰
濱寺へ子に連れられて燒けに來る　同
濱寺の日が暮れると知る交番所　かほる
濱寺のもう立秋の涙の音　同
濱寺の風に吹かれただけの妻　山茶花
濱寺で共に泳いだ丈けの戀　同
濱寺で口程に無いことが知れ　悟郎

濱寺で南京虫のきづを見せ　同
濱寺の松へ親子は手をつなぎ　路郎
濱寺へ子を連れて來る古い戀　同
暮れるまで濱寺にゐる賴りなり　同

川柳雜誌社守口支部小集（大阪）
九月十六日於當り矢ビリヤード階上　朝田新水報選

兼題　身邊近事　互選

水昌の心のやうに暮したい　昌子
灰皿の紫煙に夜の深さかな　蒼太
大阪に來てもさびしき田舍者　教樂
入選の通知が雨の朝を來る　あきら
もう一度かほを洗つて出直さん　同
味へば誠はにがい果實なり　鐵男
寢ころんで子供と遊ぶ雅氣も出來　同
卒業をすれば出家の衣かな　新水
滿洲へ來ても鑑札いる暮らし　同
振袖を女給たゝんで眞にうける　同

兼題　頭　互選

あたまから叱つてみても何んになる　當り矢
混沌の頭へ虫の聲がしみ　鐵男
その頃の頭と違ふ謹聽さ　新水
頭低くけれ商賣人の子　同
僕の頭は空つぽなんですよ　あきら
ペコ〳〵と頭をさげて今日も暮れ　同

兼題　腕　互選

腕のにぶさよ男に勝たん　昌子
踊子の腕の魔術に抱かれん　蒼太
腕前を信じて女惚れてゐる　あきら
柔道家らしい腕をまくりあげ　當り矢
腕相撲勝たん限りの力こぶ　新水
奥傳さいふ腕前を秘めてゐる　同

凄腕の女の顏が馬鹿に見え　鐵男
腕角力彼の女の愛もかゝつてる　同

夕鐘居隅會（大阪）
姫山夕鐘報選

兼題　顏　互選

かくれんぼ顏だけかくす女の子　秀葉
あの顏でやはり白粉つけてゐる　同
夏やけの顏に齒だけが浮いて見え　同
初戀の顏が今なほこびりつき　夕鐘
どつかで見た顏なのに浮びえず　同
五ツ程嘘が通つてる若い顏　同
おぼこい顏で彼女寢てゐる　同

兼題　女店員　互選

女店員嫁入までを人に馴れ　秀葉
女店員あんまりぬつて注意され　夕鐘
女店員になつた當座の恥ぢること　同

兼題　蒲團　互選

來客に急いで蒲團の衿をかけ　秀葉
大演習寺は蒲團に困るなり　同
座蒲團を二つに折つてまだ話し　夕鐘
絹夜具でこつぼり寢たは旅の空　同

宮津對座吟（宮津）
八月二十六日於椿居　西島椿報

舊同人川合舟々氏が來られ附近を見物二泊されたので色々川柳を語り句作を試みた（椿）

宮津唯一の川柳雜誌投稿家西島トシヲ居に旅裝を解いたのが二十五日の晝前、直に同君の案内で天橋立から成相山へ向ふ、船ケーブルー自動車―と宮津からものゝ一時間もかゝらない。文珠あたりのエロ風景も休暇明け近いので思つた割に少なかつた。翌日は金引の瀧を前にチビリ〳〵と酒を酌み乍ら柳談が始まる。在阪當時宇治川吟行に參加した事等を懷しさうに語る、宮津は川柳の盛んなところであるが悲しい事には強い刺激を求めてゐる同君には、そうした番傘川柳の會へ歩み寄る元氣もないらしい。

其の夜は宮津小唄を聞きながら二時迄句、トシヲ居の有名な島崎新地の附近なのでウツカリ外へも出られない。海に女に暫し歸る日を忘れさせたが、財布が空になりそうになつたので二泊二十七日の終列車で別れる宮津方面へ旅行された川柳家は是非君を訪問してやつて下さい。（舟々記）

瀧

冷いやりさしぶきを受けて夫婦立ち　椿
ドドドツとテロを思はす瀧の音　同
付出しで呑める茶屋あり瀧の音　舟々
瀧口ははるかよ松にかゝる雲　同

抱

口づけをして父さんの手へ渡し　椿
子を抱き替へて今來た釣り橋　同
乘換を知つてる車掌抱いて呉れ　舟々
抱きしめりや頬につめたき髪のくる　同
奇怪、無氣味

日をきめて人を呑むしう池の謎　椿

ニュースより

十六の石寂々と動いたり　同
辻堂を覗けば唯かゐる氣配　舟々
易々と開いて盜人氣味惡し　同

天橋と橋立

天橋へ十六日の月も良し　椿

股覗き一人旅なぞ忘れさせ　舟々
巡航船を一つ遅れて智慧の餅　同
廻天橋子供は向ひ側で待ち　同
宮津小唄彈かせて明日は歸る日よ　同
海も松もさゆりも青き橋立や　同

靈場めぐり（その三）

九月十六日　播州清水寺　水谷鮎美報

木の間から見へる山々秋の色　卜居
詣すれば僧ぼつむんと煙草のみ　同
名も知らぬ赤くなる實に秋匂ふ　同
みのる秋稻田に燕ひるがへり　鮎美
わが汗が地を伺ふ蟻へおちてゐる　同
だしぬけの坂をのぼれば秋の雲　同
樹の下の雨露にさらされ芭蕉塚　同
芭蕉翁こゝでも一句詠んでゐる　同

有馬一泊

雨の朝醉ふて宿屋を發つ氣持　卜居
瀧へきて話せば聲はのまれてゐ　同
湯の色に手拭そめて雨に發ち　同
山彦やまひこ友と瀧へくる　鮎美
二月三日を宿のおかみにひやかされ　同
朝の酒宿の浴衣の醉ひごこち　同
雨の朝妻や待たんと宿を發ち　同

二南居小集（神戸）

九月二十三日　日野華水報

若夫人

女學院出身とかで若夫人　凡骨
若夫人テニスの記事がよくわかり　市公
笑ふ事ばかりに見える若夫人　同
若夫人女中頭にさからはず　鬼笑太
若夫人花にたとへて雜誌に出　同
若夫人歌舞伎の日取知つて居る　華水
若夫人云ひ値のまゝで買ふて行き　同
同窓の用で出て行く若夫人　二南
若夫人ハツキリ雜誌讀んでゐる　同

かほる居偶會

九月十七日

これこの子やはりおまへも泣くぼくる　靖弘
大丸の窓から秋の雨になり　同
子守歌てつだふように秋の雨　同
半襟を選るにほくろがちらと見へ　かほる
秋の雨往復はがき買ひに行き　同
秋の雨淋しひとこへ來ると止み　同

觀月居小集

九月十九日日夜　川村觀月報

魚釣

釣の前飛んで見せたいいなが來る　涙六
魚釣の父へ辨當持つて來る　まさる
今晩のおかずと云ふて釣りに行く　同
岩の上吃驚させて釣つてゐる　同
魚釣りのふと借金のことと思ふ　觀月
よく釣れるとこを漁師の子に尋れ　同
釣竿の先きへ汽船の波が來る　觀月
魚釣りのことで巡査が話しに來　同
一匹は女中の釣つた魚なり　同
魚釣りを見てゐたとこで仕方なし　同
魚釣りの夢見る度に鯉を釣り　一二三
釣てゐる籠引上げて見られてゐ　同

心配

心配は小さな聲で語り合ひ　まさる
心配になつて初めて神だのみ　同
心配へ東の空が曇るなり　觀月
心配の一輪ざしがしほれてゐ　同
心配は生徒が一人見へぬなり　同
心配へいつまで雨は降るのやら　同
醫者は此の子を心配してるなり　一二三
失業と秋は心配續くなり　同

小夜曲

川柳會第一回小集（阪急線十三）

九月廿八日　燦耶居　遠藤燦耶報

雜詠

寡婦ポツ〳〵遺産を語る彼岸の夜　燦耶
あきらめのたゞ三味線を掻鳴らし　英子
失業苦風に捲れてゐるわいな　蒼太

素足

素足しろびろうたたれの夢　蒼太
緒の跡の赤さくつきり素足の娘　燦耶
夕闇に素足ひた〳〵過ぎて行き　英子

裸人居偶會

十月十日　須崎豆秋報

迷惑

公二選

迷惑はかけぬと判を賴まれる　豆秋
迷惑は預かり物をとりに來ず　裸人
迷惑を別に氣にせぬ呑み仲間　雨町
迷惑はお互ひ樣と云てくれ　同

泥醉、泥道、友情

互選

友情は財布を空にしてしまひ　豆秋
交番で寢かして貰ふ醉ひつぶれ　同
泥道になつて女の手が放れ　裸人
紛失のあこ出てからがおぼろなり　雨町
泥道をべタ〳〵車夫が走るなり　同
不覺にも泥道へ出たモボとモガ　雨町
友情をしみ〴〵と知る二日醉　同
やまいれる頃に泥醉這入つて來　同
一現でない泥醉へ女將が來　同

不朽洞から

路郎生

▼編輯は事務所でやるが編輯後記はいつでも不朽洞で書くことにしてゐる。編輯が終つて、すぐにその場で編輯後記を書くだけの時間がないので、原稿が印刷屋へ廻つてから後記は不朽洞の大机の上で出來ることになつてゐる。それで今月から後記の見出しを「不朽洞から」と改めた。本誌の編輯後記が單なる編輯後記でなくその他の事にまで及んでゐるので不朽洞からとした方がより自然であると思つたからである。

▼月評は例によつて里十九居を煩はした。

▼今度句會の會費値下げを斷行した。會費不要の域へまで押進めたいが今のところではそうした理想の實現は遠い。

▼本號の近作柳樽は前號に比し遙に優秀だつたので頁數が殖えた。從つて頁數に狂ひが出たので比較的ふるはないビルディングを犠牲にして本號ではコレが發表を見合はした。ビルの人々には誠にすまないが、全没といふ譯でなく一回休んだ形であるからその點おゆるしを願ひたい

▼粒々集、光耀抄ふるはず、大いに力作を寄せられたい。

▼私は前號で階上生活から階下に移つた事を報じたが、僅に一ヶ月足らずで再び階上生活へもどることゝした。それは腹乃の父、芦村翁が十月五日の夜天下茶屋の某家で卒倒したため、階下の子供室が翁の病室にあてられ、僕の當屋が子供室になつた關係からである。僕の生活が普通の家庭生活者のそれであれば子供と共に同室で暮らすことは一つの喜びでもあるのだが原稿へ文字を埋める仕事では、さうは行かぬ。それに玄關近いので、人が訪れて來ても奥で氣づかぬと一々自分で首を出さねばならぬ。勝手の話が手にとるやうに聞える。耳元でこどもの叫び聲がする。あまりに現實に觸れすぎるので仕事に專心になれぬと云つた點もある。そこで再び階上へ舞ひ戻つた。なんだか旅から戻つて來たやうな落着いた感じがするのも可笑しいコンナことはどうでもいゝようなものゝ、階下生活の感想を聞かれたりしたので、も一度こゝで報告することにした。

▼至誠川柳會の夜、近日東京行くと云つてゐた多聞君は東の空へ飛んだ賴りを中禪寺から寄せたもつと搖れゝばいゝといふやうな元氣な句があつたが、墜ちてもいゝとは書いてなかつた。

▼柳路君は開原で柳陽君に會ひ會談して寄せ書をくれた。柳陽君は曾て僕を訪れてくれたが、僕が不在で會へなかつた。來年は來るさうだ。こん度は會へるだらう。生きてさへゐれば。▼來花童子君は「旅のこゝろ」で紹介したエロ百パーセントの踊の妙手、有石君(青森)と大沼公園の湖月から寄せ書を呉れた。秋晴の大沼はいゝだらう。▼悟郎君は北店を新設してその方へ移つた(天神橋七丁目電車筋)從來の店を南店として弟の十字路君に讓つた。曾我廼家のやうな雅號を持つ二人の兄弟が同じ商賣を仲よくやつて行けるノも愉快に違ひない蔭ながら發展を祈つてゐる。

▼醫大の長崎博士(柳秀)から醫大から當觀艦式拜觀の船に同乘せぬかとの案内を恭うしたが何分健康を害してゐるのと家族に病人があるので拜辭した。

▼能因會の葉吉、九光、喜四雄三竿、五花村、江舟の諸氏が松茸狩ピクニックをやつたからと云つて「松茸におかめも混る賑かさ」の句を寄せられた。

▼長谷川一徹博士が健康を害されてゐる。活動が過ぎた結果らしい。

▼谷内與一郎氏が醫博の學位をうけられた。欣喜に堪えない。

▼大連の中沼力平(若蛙)氏が長崎へ移つた報らせに接したが川柳句帳舍の「通」は矢張り續けて出すそうである。(長崎市東小島町七九)

▼牛田悌次(牛山)氏の御令閨が亡くなられた。悔みに行つたら六人のお子さんがあると聞いた慰めるに辭もなかつた。

▼宮尾しげを氏が來訪された。「きやり」のために顔をかゝせよとの注文であつたそうだが、あいにく不在で失禮した。

十一月例會

日時　十一月一日午後六時半

會場　大阪南區清水町市電停留所四入北側　端の坊

兼題　「煙」三句

會費　金貳拾錢

路郎選

郵便はがき

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社内

創作
奬勵 懸賞川柳係

川柳雜誌第七卷第十一號（通卷八十二號）附錄　昭和五年十一月一日

切取線

川柳雑誌【第壹回】懸賞川柳投句用紙

（内以句五數句）

住所

氏名

（没は反違定規）

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼近作柳樽は一部又は二部のいづれかを明記する事。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他つき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第八卷第一號課題

十一月五日締切

（各題十句以内）

▼酒　川上三太郎選

▼初雪　麻生葭乃選

▼小鳥　伊藤綠之助　中見光路　共選

第八卷第二號課題

十二月五日締切

（各題十句以内）

▼雨　橋本綠雨選

▼鼠　酒井駒人選

▼病　長崎柳秀　長谷川一徹　共選

毎號募集

▼近作柳樽（一部）十句以内　麻生路郎選

▼近作柳樽（二部）十五句以内　安井ひろし選

◇近作柳樽の一部と二部へ同一人で投句することはお斷りします。

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號（特輯號共）　金四拾錢
半壹箇年前金（特輯號共）　壹圓八拾錢
壹箇年前金　參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年十月廿五日印刷
昭和五年十一月一日發行

第七卷第十一號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）玉　森　堂（神戸）米田、後藤、寶文館（岡館）
石堀（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雑誌社關係の人々（順ばらい）

賛助員

池澤樂居　川上三太郎
吉川村花菱　友淵貴山
岡島平清　増位汀柳
大道弘雄　白井梅里
吉田銀波樓　河野双車　中島鐵洲
岡本一平　川村觀月　丸山公二
片岡直方　辻左馬　越中今雨
嘉納純　藤岡櫻果　藤里好古
前田雀郎　熊本黄蛾　平井蒼太
安川久流美　永田里十九　酒井駒人
中原圭二郎　日野華水　朝田新水
中川めかく子　柳川洲馬　森石竹水　關本雅幽
中澤濁水　長山元水　谷鮎美
中野柳陽　淺井冷々子　越田久水
安西杏三　楊井二南　須崎豆秋
阿形一杉　桑原京郎　植田湖舟　上野錦水　櫻井圓角　北山悟郎　喜多春秋　松村敏郎　松田多郎　山本雨迷　木村晃卓　木山青砂郎　長谷川一徹　出口雨町　太田朝陽　龜井花童子　高橋かほる　竹内多聞　麻生路郎

同人

伊藤絲之助

編輯局（同人）

橋本絲雨　安井ひろし　松丘町二　伊藤愚陀　松盛琴人　岩崎柳路　岩本素人　阿部閑生　伊藤絲之助　原史風　福田山雨樓　太田朝陽　麻生葭乃

客員

伊藤彦造　石川双葉子　池田雪峰　生田翠夢　末弘嚴太郎　淺田一　赤井清司　藤本卯之助　藤森東魚　國枝史郎　村作　長田中辰二　崎柳秀　小出榴重　篠原春雨　柴谷柴舟　蛭子省二　相元紋太

社友

大島濤明　西田艸樂　村明珠　岡田三面子

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事楊井　二南
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
國館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷　鮎美
盤ケ池支部（大阪府）幹事植田　湖舟
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
箕川支部（島根縣）幹事伊藤　絲之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事熊本　黄蛾
鶴町支部（大阪市）幹事關本　雅幽
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
高知第二支部（高知縣）長山　元水
山口藤寺　山本凡々子　三輪夏曉
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事岩本　素人
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事熊本　黄蛾
鶴町支部（大阪市）幹事關本　雅幽
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
高知第二支部（高知縣）長山　元水
別府支部（別府市）幹事木村　晃卓

道プラから

公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石なごのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法としては古本を買へばいゝ。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道プラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。(路郎生)

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二一番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年十月廿五日印刷納本　昭和五年十一月一日發行

漫畫界の十大家共同執筆!!

川柳漫畫全集

元祿寶曆時代から大正昭和の今日に至る迄、何萬と云ふ川柳家が、鋭い眼で人間世界の横顔を見つくして「これだッ」と云ふ處を句にしたもの それを當代の一流の漫畫家を網羅して繪にした平凡社自慢の出版。

全十二卷の内容

1 世間哲學（元祿寶曆の卷）
2 寸鐵双紙（明和の卷）
3 臍茶問答（安永の卷）
4 大笑讀本（天明の卷）
5 案山子は踊る（寛政の卷）
6 人情大學（文化の卷）
7 南瓜の横顔（文政の卷）
8 エロエロ狸（天保の卷）
9 ウルトラじんた（明治の卷）
10 ユーモアービル（大正の卷）
11 浮世行進曲（現代の卷）
12 日本噴飯史（詠史の卷）

四六判本文三百廿五頁 總コットン紙オフセット印刷、毎卷十大家各卅二頁づゝ執筆 會費毎月拂一圓廿錢（申込金ナシ）送料毎冊十四錢 東京市内六錢

選輯
矢野錦浪
川上三太郎
漫畫家
池部鈞
池田永一治
服部亮英
細木原青起
田中比左良
前川千帆
水島爾保布
宮尾しげを
清水對岳坊
代田收一

東京麴町下六番町
平凡社
振替東京二九六三九

定價 金三拾錢